

斐川町埋蔵文化財調査報告 4

平野遺跡群発掘調査報告書 II

1984年3月

島根県斐川町教育委員会

斐川町埋蔵文化財調査報告4

平野遺跡群発掘調査報告書 II

1984年3月

島根県斐川町教育委員会

序

このたび、誘致企業である株式会社村田製作所の敷地造成計画変更に伴って、平野遺跡群の第二次発掘調査を実施致しました。

今回は、第一次調査で確認された横穴墓群のうち東支群の横穴墓7穴の発掘調査を行ない、これで第一次調査の5穴と合せて東支群12穴全てを調査したことになります。

ところで、当斐川町には仏経山（神名火山）山麓を中心に様々な形態をもつ数多くの横穴墓群が存在しており、その数は14群60穴以上が確認されています。

今回の調査によって、当地域における古墳時代後期社会的一面を垣間見ると同時に、横穴墓の群構成とその性格を窺う資料を得ることができました。

本書が県下における横穴墓研究の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、本調査にあたり終始御指導下さいました島根県教育委員会をはじめ関係者の皆様に衷心より御礼申し上げます。

1984年3月

斐川町教育委員会

教育長 古川 喜志夫



例 言

1. 本書は、株式会社村田製作所の工場予定地内に所在する平野遺跡群のうち平野横穴墓東支群（斐川郡斐川町大字上直江字平野2045の1番地他）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、斐川町教育委員会が昭和57年12月10日から昭和58年3月31日および昭和58年9月1日から昭和58年9月17日までの2次にわたりて実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

調査指導 勝部 昭（島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第1係長）

西尾克己（　　〃　　主事）

調査員 金篠 基（斐川町教育委員会社会教育課主事）

宍道年弘（　　〃　　嘱託）

調査補助員 桑原真治・今岡一三・大峰裕貴

萩 雅人・長見康弘・妹尾美典

事務局 多々納弘（斐川町教育委員会社会教育課長 昭和57年）

新宮義忠（　　〃　　昭和58年）

4. 調査にあたっては、村田製作所、斐川町役場開発課および地元各位の協力、援助を頂いた。記して謝意を表す。
5. 本書の執筆はⅠ章とⅡ章の(6)～(12)を金篠が、Ⅱ章の(1)～(5)とⅢ章を宍道がそれぞれ分担し、西尾が補筆した。また、図版作製は金篠、宍道、桑原が行った。なお、本書作製にあたり、伊田喜浩、伊藤克己（島根大学学生）の協力を得た。
6. 実測図の方位は調査時における磁北である。
7. 人骨鑑定については、鳥取大学医学部（法医学教室）井上晃孝助教授に依頼した。
8. 出土遺物は斐川町教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

I. 調査にいたる経緯.....	1
II. 平野横穴墓東支群の概要.....	2
(1) 1号横穴墓.....	3
(2) 2号横穴墓.....	4
(3) 3号横穴墓.....	9
(4) 4号横穴墓.....	10
(5) 5号横穴墓.....	14
(6) 6号横穴墓.....	19
(7) 7号横穴墓.....	19
(8) 8号横穴墓.....	20
(9) 9号横穴墓.....	22
(10) 10号横穴墓.....	26
(11) 11号横穴墓.....	28
(12) 12号横穴墓.....	28
(13) 出土遺物.....	30
III. ま と め.....	47
(1) 東支群の性格.....	47
(2) 平野横穴墓群の性格.....	48
IV. 出土人骨鑑定.....	53

挿 図 目 次

図 1 平野横穴墓群全体図	1
図 2 東支群横穴墓配置図	2
図 3 1号横穴墓実測図	5~6
図 4 2号横穴墓実測図	7~8
図 5 3号横穴墓実測図	11~12
図 6 4号横穴墓実測図	15~16
図 7 5号横穴墓実測図	17~18
図 8 7号横穴墓実測図	21
図 9 8号横穴墓実測図	23
図10 9号横穴墓実測図	25
図11 10号横穴墓実測図	27
図12 11号横穴墓実測図	29
図13 12号横穴墓実測図	31
図14 斐川町内横穴墓分布図	52
図15 4号横穴墓人骨・遺物出土状況	55
図16 5号横穴墓人骨・遺物出土状況	58

表 目 次

表1~13 出土土器観察表	34~46
表14 平野横穴墓群一覧表	50
表15 斐川町横穴墓一覧表	51

図 版 目 次

- 1 東支群1号・2号横穴墓出土遺物実測図
- 2 東支群3号横穴墓出土遺物実測図
- 3 東支群3号・4号横穴墓出土遺物実測図
- 4 東支群4号・5号横穴墓出土遺物実測図
- 5 東支群5号・8号横穴墓出土遺物実測図
- 6 東支群9号・10号横穴墓・6号横穴墓下方出土遺物実測図
- 7 平野遺跡群周辺の航空写真及び平野横穴墓東支群近景
- 8 東支群1号・2号・3号横穴墓近景及び4号・5号・6号横穴墓近景
- 9 東支群7号・8号・9号横穴墓近景及び10号・11号・12号横穴墓近景
- 10 東支群1号横穴墓前景及び玄門土層堆積状況
- 11 東支群2号横穴墓前景及び玄室内土層堆積状況
- 12 東支群3号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内遺物出土状況
- 13 東支群4号横穴墓前景及び羨門閉塞状況
- 14 東支群4号横穴墓玄室内正面及び玄室内人骨及び遺物出土状況
- 15 東支群5号横穴墓前景及び羨門閉塞状況
- 16 東支群5号横穴墓玄室内正面及び玄室内人骨及び遺物出土状況
- 17 東支群7号横穴墓玄室内正面及び玄室内土層堆積状況
- 18 東支群8号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内遺物出土状況
- 19 東支群9号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内正面
- 20 東支群10号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内正面
- 21 東支群11号横穴墓玄室内土層堆積状況及び玄室内正面
- 22 東支群12号横穴墓羨門閉塞状況及び玄室内正面
- 23~28 東支群出土遺物写真

I. 調査にいたる経緯

株式会社村田製作所の進出に伴い、工場予定地内の埋蔵文化財調査（第1次発掘調査）を昭和57年7月12日より昭和58年3月5日まで実施し、3基の高射砲陣地と2群の横穴墓を確認した。（註1）

その後、同年7月3日、造成工事変更に伴う発掘通知書（文化財保護法第57条の3）が提出されたが、当該地には未発掘の横穴墓が存在する可能性があったため、関係者と協議のうえ、同年9月1日より同17日まで第2次発掘調査を行った。

（註1）『平野遺跡群発掘調査報告書1』（斐川町教育委員会、1983年）



図1 平野横穴墓群全体図

II. 平野横穴墓東支群の概要

東支群は、馬蹄形の谷が南へ開いた東側斜面に立地している。この東側斜面には、小規模な谷が二カ所認められており、本支群はその北側のU字形の谷に存在する。調査した横穴墓12穴は、標高12~16mの比較的急傾斜面に穿たれている。横穴墓の呼称は、北端のものから順次1号横穴墓、2号横穴墓とし、南端のものを12号横穴墓とする。以下、本支群の各横穴墓の概要を記すこととする。

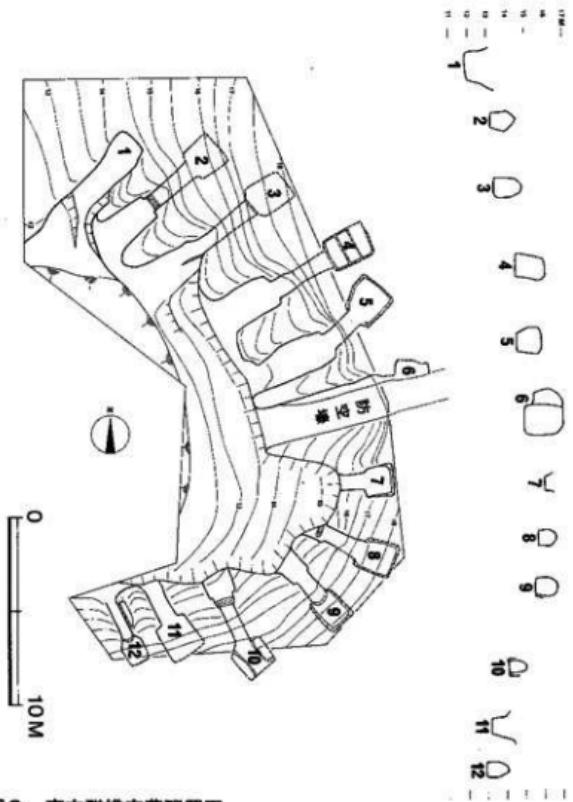


図2 東支群横穴墓配置図

(1) 1号横穴墓

木横穴墓は、東支群の中では最も北側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分は標高約12mを測り、群内では最も低い立地である。表土を剥ぎ、不整形なプランを検出した時点で、既に玄室と羨道の天井が崩壊し、旧状が損われていることを確認した。このような状況のために、横穴墓の各部の境界、すなわち、玄室と羨道及び前庭の各部の境は、平面プランあるいは堆積した土層でも明確にすることはできなかった。従って、側壁でかすかに残る稜線でもって各々の境の目安とした。

玄室の平面プランは、奥行き254cm、横幅は170cm前後になり、原状では不整形な形を呈する。奥壁は床面から68cmの高さまでは内傾して立ち上がり、前壁と天井壁は残存しない。側壁も崩れ、本來の姿を復元することは不可能である。羨道は長さ150cm、幅130cm前後になり、天井壁と側壁は崩れている。前庭は長さ446cm、幅は134~230cmを測り、側壁は外傾し、北側壁の床面は直線的に西方に延び、南側壁の床面は湾曲して2号横穴墓の前庭入口部分を形成する。玄室から前庭にかけての床面は、なだらかに傾斜する。

土層の堆積状況をみると、玄室から羨道にかけて床面から約35cm前後の厚さで黄灰色土層と灰茶色土層が堆積し、玄室内ではその上層に天井壁や側壁の崩壊土が堆積する。

一方、羨道については、縦断面で白黄色土の落ち込みが斜めに帶状に観察される。この白黄色土層によって、前庭ではほぼ平坦に堆積していた下層の黄褐色土層、黄黒色土層が分断される形となる。羨道附近の北側壁で検出された須恵器の蓋坪は、床面から約32cm上の位置にあたり、白黄色土層の上面にあたることから、追葬時に玄室内から持ち出された遺物と考えられる。言いかえると、追葬により、黄褐色土層と黄黒色土層がカットされ、その時に白黄色土層が堆積し、その後新たに上層の黄黒色土層が堆積したものと考えられる。

検出された遺物は次のとおりである。

羨道 須恵器 蓋2、坪1

前庭 須恵器 蓋1、坪2、高坪1、鰐1

羨道附近の北側壁際で出土した蓋2と坪1は、床面上約32cmの白黄色土層上面からのものである。これは追葬時に玄室内の以前の副葬品を羨門の片隅に片付けたものと考えられる。蓋は径10.8cmの蓋坪の蓋部と破片であるが口縁部の内面にかえりを有するものがある。坪は高台が付き、口縁部が外傾するものがある。

前庭では下層の黄黒色土層から出土した。蓋は輪状のつまみを有して口縁部はやや外反して下へ垂れるもの、坪は蓋坪の坪部の破片と、高台が付き口縁部は内溝するものである。また、高坪は脚部、鰐は口縁部と胴部がそれぞれ1個体分出土した。

(2) 2号横穴墓

本横穴墓は1号横穴墓の南側に隣接し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約14mとなる。玄室の残存状況は比較的良好であるが、羨道は天井及び側壁上部の半分以上が崩れている。

玄室の平面プランは、台形状を呈し、奥行き180cm、横幅は奥壁附近で182cm、入口附近で152cmを測る。北側壁には盗掘孔がある。奥壁は床面から28cmまでは堆積土と壁面の剥離により外傾気味であるが、上部は内傾して立ち上がる。前壁はあまり残存しないが、天井附近ではやや内傾する。側壁は土砂が堆積した部分は垂直に近く上部は内傾あるいは内湾して大井に至る。天井は現存高180cmを測る。玄室は横断面がアーチ形を呈す。いわゆるカマボコ形と呼ばれる天井形態を示す。床面はごくわずかだけ、羨道に向けてドリ傾斜となる。

羨道は長さ266cm、幅は玄室の入口で102cm、羨門で112cmを測り、中央部でやや膨張りをもち、羨門付近で狭まる形状を呈する。閉塞施設としては床面に幅15cm深さ10cmの横溝が穿ってあり、閉塞用の板材が嵌め込まれていたものと考えられる。側壁は床面から83cmまではやや外傾して立ちあがる。天井は大半が崩壊しているものの、玄室の入口附近中央部で高さ160cmを測る。床面は前庭に向けて下り傾斜となる。

前庭は長さ264cm、幅は154～194cmを測り、前庭の入口に向けて広がる形状を呈する。側壁は外傾し、北側壁の床面は屈曲して1号横穴墓の前庭へ、南側壁の床面は緩やかに湾曲し3号横穴墓の前庭の北側壁へ延びる。床面は前庭の入口に向けて下り傾斜となり、羨門から380cmのところで急傾斜となる。

土層の堆積状況をみると、玄室から羨道にかけては厚さ10cm前後の明茶色土層と淡黄白色土層が堆積し、その上に流れ込みの土砂が堆積している。前庭では、側壁の崩壊上と思われる茶灰褐色土層の上に暗黄茶色土、黄黒色土層などが、流れ込んだ状況で堆積している。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	鉄製品	刀子1
	須恵器	蓋2 壺1
羨道	須恵器	蓋1
前庭	須恵器	蓋5 外1 壺1

玄室では刀身の先端を欠いた刀子1が床面直上から出土した。須恵器は径8cmクラスの

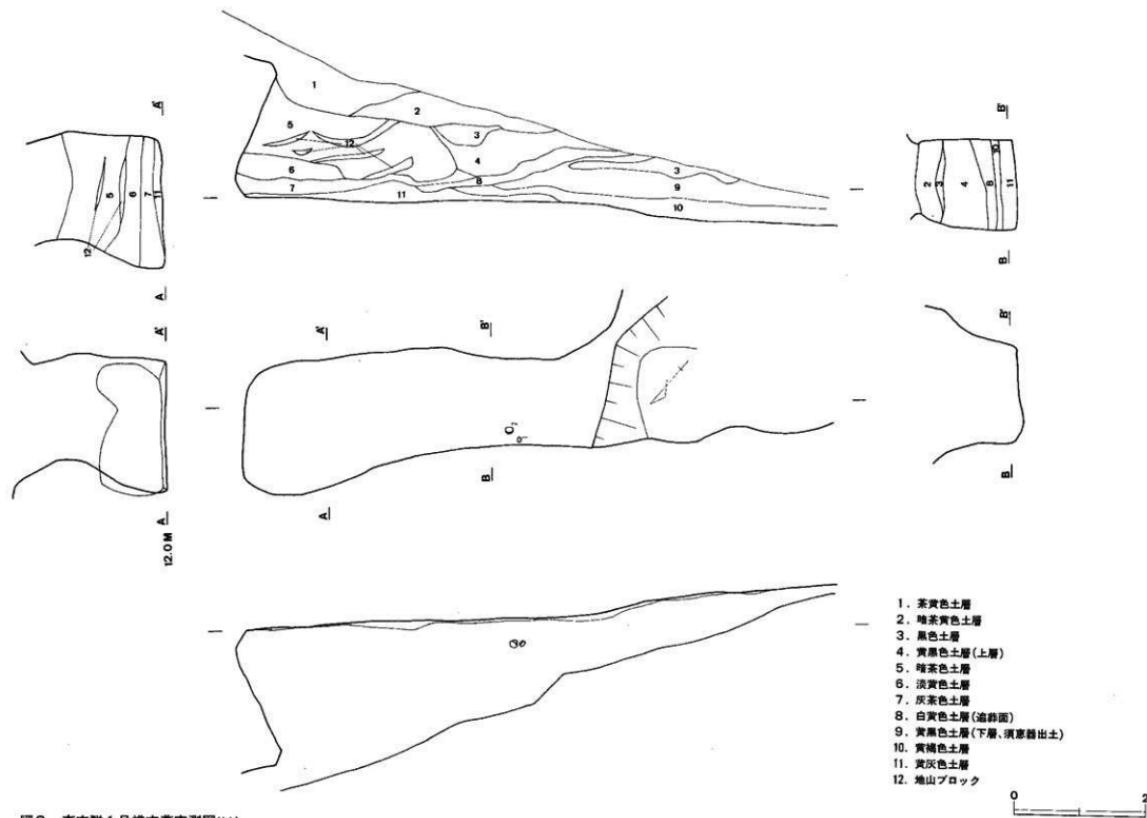


図3 東支群1号横穴墓実測図(%)

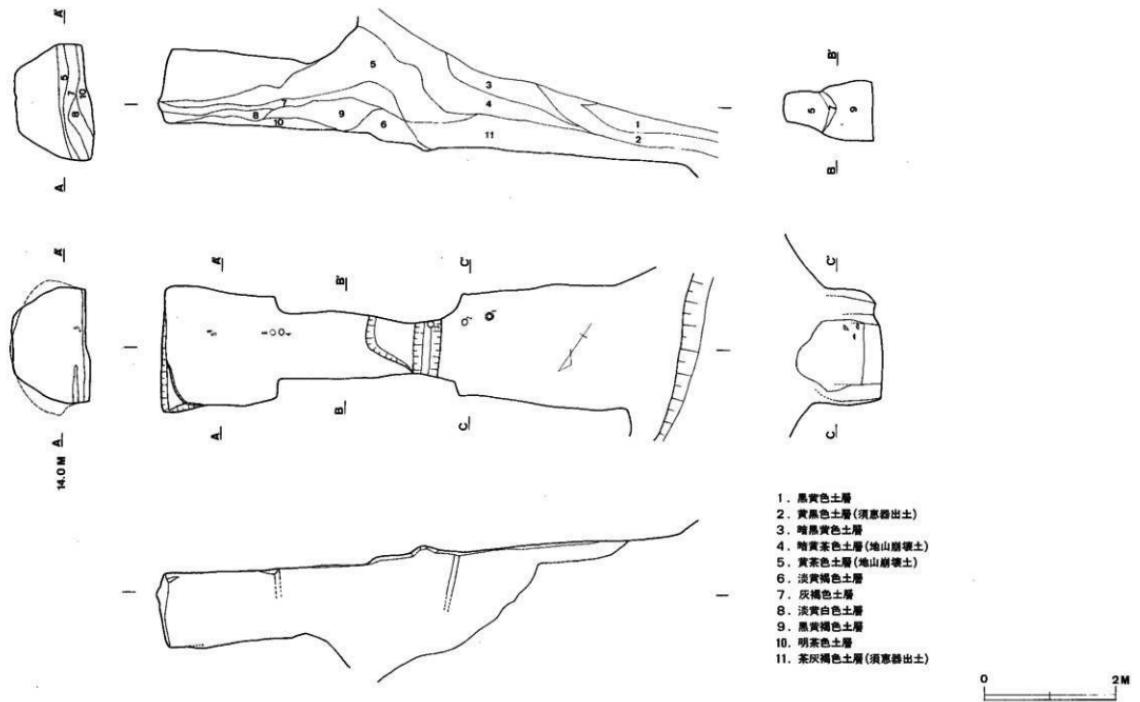


図4 東支群2号横穴墓実測図(1/6)

小形の蓋と坏が床面上からと、径10.5cmの蓋が玄室の堆積土層（明茶色土層）の上面から出土した。

羨道では羨門の閉塞用と思われる横溝の南側壁際で径10.4cmの須恵器の蓋が床面から56cm浮いた黄茶色土層から出土した。これは追葬の可能性を示唆するものであろう。

前庭では羨門付近の南側壁寄りで径7.85cmの蓋と径9.45cmの坏が床面から32cm浮いた茶灰褐色土層から出土した。また輪状つまみを有する蓋、内面にかえりを有する蓋、蓋の胴部などはすべて黄黒色土層から出土した。

(3) 3号横穴墓

本横穴墓は2号横穴墓の南側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約14mで、玄室の床面は2号横穴墓とはほぼ同じ高さにある。残存状況は良い方であるが、玄室、羨道とも天井が剥離しているために、その境が不明瞭である。また床面には盗掘孔があり、その中に須恵器が混入していた。

玄室の平面プランは、奥行き218cm、横幅は奥壁付近で162cm、玄門付近で176cmを測り、やや縦長の長方形を呈する。奥壁は床面から46cmまでは土砂の堆積により本来の壁面をとどめていないが、上部はやや内傾ぎみに立ち上がる。前壁は不明である。天井の現存高は奥壁付近で140cm、玄室入口で130cmを測る。側壁は内湾して丸い天井に至る。玄室は横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入テント形に属する。

床面は羨道に向けて下り傾斜となる。羨道は玄室の床面より約22cm低く造られており、長さ266cm、幅は玄門付近で102cm、羨門で112cmを測り、非常に細長い形状を呈する。側壁は床面から82cmまではやや外傾して立ち上がる。天井壁は一部剥離し、現存高160cm前後を測る。羨門付近は左右の側壁が異なり、明確には形成されていない。床面は、前庭に向けて下り傾斜となる。

前庭は長さ264cm、幅は154～194cmを測り、入口附近で広がる形状を呈するが盃つである。側壁は外傾し、北側壁の床面は徐々に湾曲して2号横穴墓の前庭へ、南側壁の床面はまっすぐ西方向へ延びる。床面は、前庭の入口に向けて下り傾斜で、羨門から320cmのところで急傾斜となる。

土層の堆積状況について、縦断面セクションをみると玄室から後道にかけての土層と前庭の土層とでは流れ込みの方向が逆方向になっていることがわかる。玄室から羨道にかけては、床面に白黄色土層から暗黄色土層までが約40cmの厚さではば均一に堆積する。その後外部からの流れ込みの土砂とみられる明黄色土層、明茶黄色土層、淡白黄色土層が堆積している。前庭では羨道の天井が前庭方向に崩壊したためにすでに堆積していた前庭の土

砂が押し流された状況である。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	蓋3	坏3	高坏1	短頸壺1	甌1
羨道	鉄製品	刀子2				
	須恵器	蓋1		坏1		
前庭	玉類	勾玉1				
	須恵器	蓋6		坏4	小形高坏1	長頸壺2

玄室からは床面中央部に集中して須恵器9個体が出土した。その器種はバラエティに富んでいる。蓋は口径11.25cmの蓋坏の蓋部、乳頭状のつまみの付いた小形の蓋、短頸壺の蓋と考えられ小形で稜線のしっかりしたものとがある。坏は口径8.9cm～9.9cmの蓋坏の坏部がある。高坏と甌は小形のもので、高坏の外部は深く、脚部は二段二方向の通しを有するもの、甌は口縁部が外反し、胴部は小作りのものである。短頸壺は器高12.45cm、胴部最大径14.2cmで口縁部径が小さいものである。これらは出土状況から一括遺物と考えられる。

羨道からは刀子2と須恵器2が出土した。刀子2のうち1つは調査中の不手際で紛失したが、残る1つは刀身部のみ残存している。出土位置は羨道の北側壁寄りで床面から約16cm浮いていた。須恵器は口径11.4cmの蓋坏の蓋部と、口径10.0cmの坏部がやはり北側壁寄りで出土した。これらは白黄色土層に存在した。

前庭からは勾玉1と須恵器13個体が出土した。勾玉は羨門付近の南側壁寄りで床面からやや浮いた状態で出土した。須恵器は口径10.0cm前後の蓋坏の蓋部2、乳頭状つまみ付で小形の蓋、輪状のつまみ付でかえりを有する大形の蓋、輪状のつまみ付でかえりの無い蓋、かえりを有する蓋の口縁部の破片2、口径9.0cm前後の蓋坏の坏部2、高台付坏2、小形でグラス型の高坏、長頸壺と長頸壺の口縁部の破片が出土した。出土位置は明確にしないが、大半は、黒色土層と黒黄色土層から出土したものである。

(4) 4号横穴墓

本横穴墓は3号横穴墓の南側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約15mとなる。玄室の残存状況は良好であるが、羨道は天井梁が剥離しているため、玄室との境が不明瞭である。また、羨門付近の天井も大きく崩壊している。

玄室の平面プランは、奥行き230cm、横幅は奥壁付近で186cm、玄門付近で170cmを測り、縱長の長方形を呈する。奥壁はやや内傾して立ち上がる。前壁は不明である。側壁は内湾して、そのまま天井に至る。天井は中央に稜がみられ、高さ104～110cmを測る。玄室は横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入テント形を有する。床面は奥に向かって3段と高く地山を

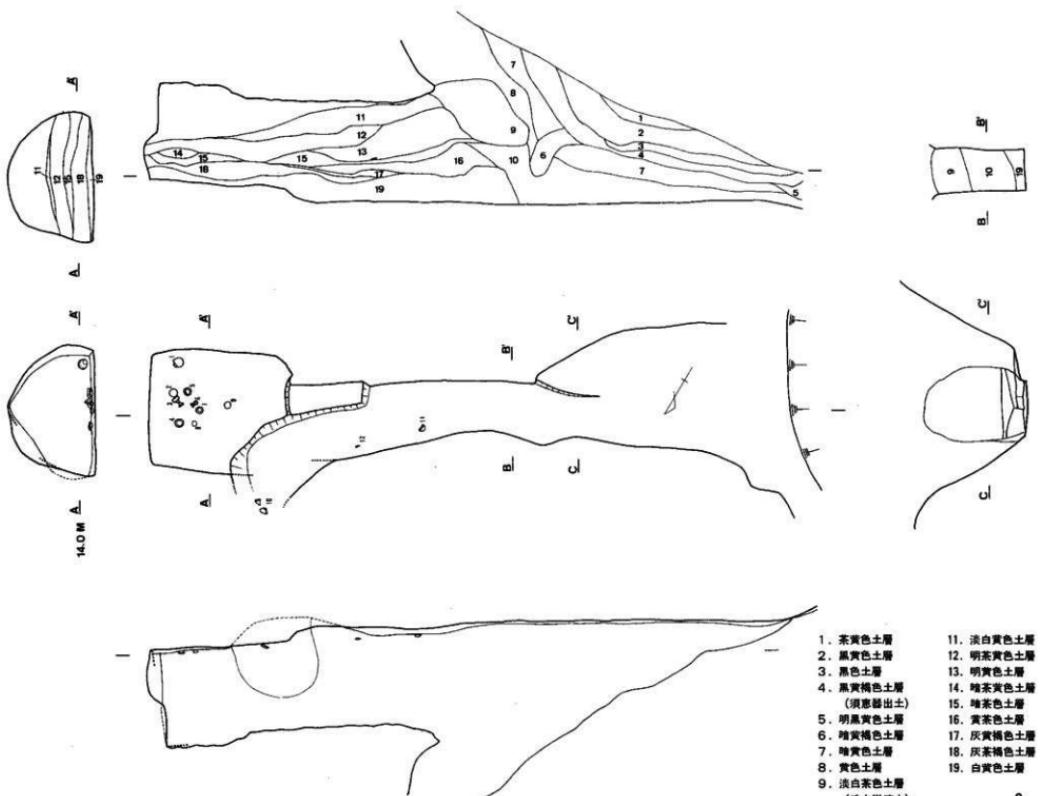


図5 東支群3号横穴墓測定図(16)

を掘り残し、周囲に溝を設けている。上段の幅は68cm、中段は72cm、下段は78cmを測り、高くなるに連れて幅が狭くなっていることが判る。各段の段差は、上段と中段とでは10cm、中段と下段とでは8cm、下段と羨道の床面とでは8cmを測る。溝は上段の北側壁際を除き、各壁の周囲に巡らされており排水溝の役目をしていたものと考えられる。

羨道は長さ340cm、幅は玄室の入口付近で100cm、中央付近の狭いところで72cm、羨門で160cmを測る。平面形は玄室の入口から次第に狭くなり、中程から脛張りをもって羨門に至る形となる。側壁は外傾気味に立ち上がり天井に至るが、天井壁は剥離しているために形状は不明である。天井の現存高は110cmを測る。床面は、前庭に向けてわずかに傾斜する。

前庭は長さ324cm、幅は166cm～220cmを測り、前庭入口に向けて広がる形状を呈する。側壁は外傾し、北側壁の床面は湾曲して3号横穴墓の前庭の上部に、南側壁の床面は屈曲して5号横穴墓の前庭へと延びる。床面は前庭入口に向けて緩やかに傾斜し、羨門から3.8mの所で急傾斜となる。また床面には人頭大の石とやや小さい石がセットで2対出土した。出土状況から原位置とは思われない。

土層の堆積状況をみると、羨道から前庭にかけての地山面に厚く淡茶黄色土層が堆積していることがわかる。この土層は軟質で地山に似た色調であるため、周辺の地山が風化して堆積したものと思われる。玄室内にはこれも地山に似た色調の黄白色土層、黄色土層、白黄色土層が流れ込んでいる。その上に羨道の天井壁崩壊土（淡黄茶色土層）が覆いかぶさる形となる。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	銅製品	耳環3
	鉄製品	刀子2
	須恵器	蓋3 壺1
羨道	須恵器	壺2
前庭	須恵器	蓋2 壺1 小形高壺1 短頸壺1 平瓶1 長2

玄室からは金貼りした耳環が3ヶ所から出土した。1つは上段と中段との間で出土した。出土状況からおそらく原位置ではないものと思われる。1つは中段の入口寄りで頭蓋骨に伴っていた。1つは中段の入口寄りで下段との境あたりであった。刀子のうち1つは調査中に粉失したが、出土位置は下段の南側壁寄りであった。残りの一つは、上段の北側壁寄りで耳環の近くで出土した。須恵器は中段の南側壁寄りに4個体が集中していた。いずれも床面に伏せた状態で3ヶ所あり、その内の1つは蓋2つが入れ子式に重ねてあった。こ

の付近には頭蓋骨が遺存していた。

羨道からは、壙2が中央付近と羨門の床面から出土した。羨門出土の壙から23cm離れて壙が1つ出土した。この2つは床面に並べて置いた状況である。

前庭からは、主に茶黒色土層と黒黄色土層から須恵器が出土したが、短頸壺と伴出した蓋は淡茶黄色土層の高い位置から出土した。甕の1つは肩部以下を欠き、他の1つは口縁部と胴部下半部を欠くもので散在していた。

(5) 5号横穴墓

本横穴墓は4号横穴墓の南側に位置し、南西方向に開口している。羨門部分の標高は約15mとなり、4号横穴墓とはほぼ同じ高さにある。玄室の残存状況は比較的良好であるが、羨道は天井が大きく崩壊し旧状を保っていない。

玄室の平面プランは、奥行き224cm、横幅は奥壁付近で196cm、玄室入口付近で162cmを測るが、北側壁が内側に歪んだ形となる。奥壁はやや内傾して立ち上がり、前壁は不明である。側壁は内湾して丸い天井に至る。天井の高さは95cmを測る。玄室は、横断面がアーチ形を呈し、いわゆるカマボコ形に属するものである。床面は奥から羨道方向へ緩やかに傾斜する。床面の周囲には壁に沿って溝を巡らし、排水溝を設けている。

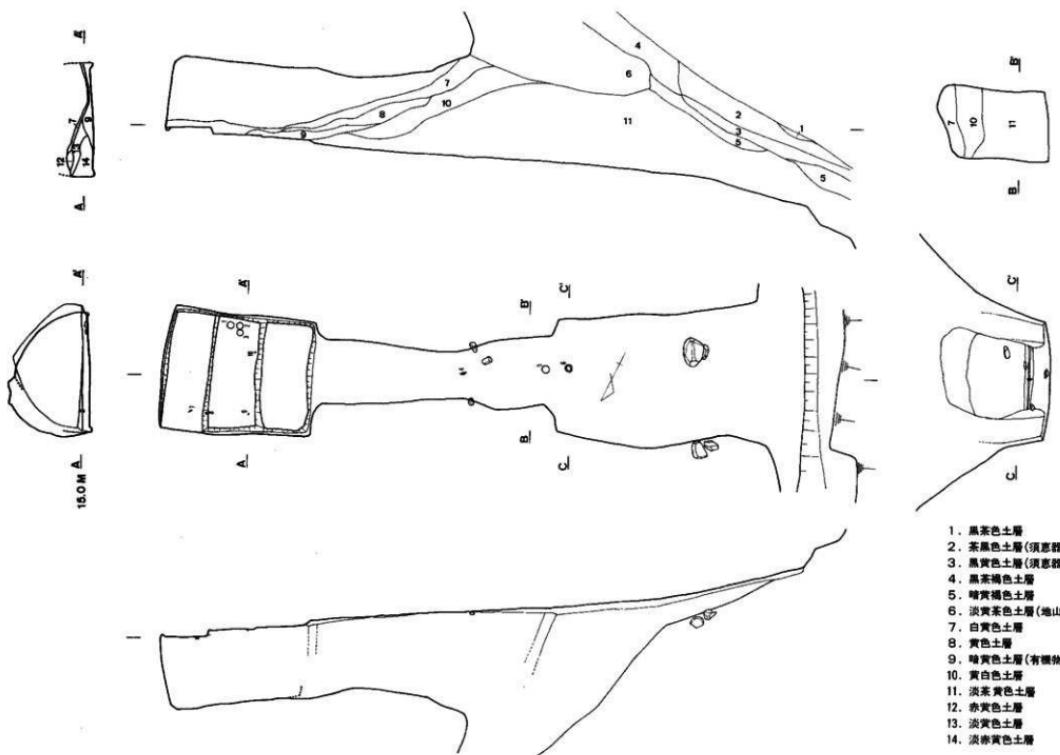
羨道は長さ234cm、幅は玄室入口付近で104cm、羨門で138cmを測り、前庭に向って広がる形状を呈する。側壁は130cm前後まではやや外傾して立ちあがる。天井は崩壊しているが、玄室側で現存高126cmを測る。床面はほぼ平坦で、玄室より一段低く造られている。

前庭は長さ450cm、幅は152~186cmを測り、中程でやや膨らみ前庭入口付近で狭くなる形状を呈する。側壁は外傾し、北側壁の床面は屈曲して4号横穴墓の前庭へ、南側壁の床面はまっすぐ延びる。床面は前庭入口に向けて傾斜し、羨門から380cmの所で急傾斜となる。

土層の堆積状況を見ると、まず羨道から前庭にかけての床面に周囲の地山の崩壊土（淡茶黄色土層）が最高100cmの厚さで堆積している。その後玄室内に流れ込みの土砂が天井近くまで黄色土層と褐色土層が交互に堆積する。前庭では、黒色土層が淡茶黄色土層上に堆積した後、羨道の天井崩壊土が覆いかぶさる形となっている。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室	須恵器	蓋4	壙6
	土師器	壙1	
前庭	須恵器	蓋2	壙4 長頸壺1
	土師器	壺1	



1. 黑茶色土層
2. 茶黑茶色土層(須底器出土)
3. 黑黃茶色土層(須底器出土)
4. 黑素褐色土層
5. 單黃褐色土層
6. 淡黃茶色土層(地山崩出土)
7. 白黃色土層
8. 黃色土層
9. 單黃色土層(有植物含)
10. 黃白色土層
11. 淡茶黃色土層
12. 赤黃色土層
13. 淡黃色土層
14. 淡赤黃色土層

图6 東支群4号横穴墓实测图(%)



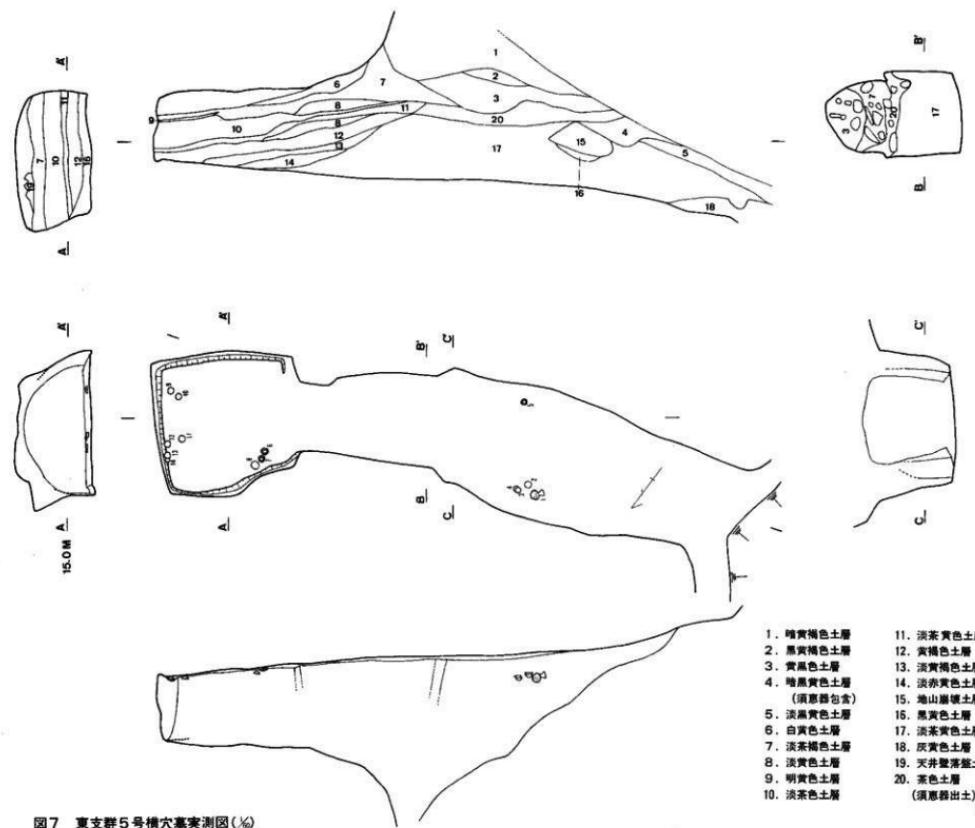


図7 東支群5号横穴墓実測図(%)

玄室からは、須恵器蓋4、坏6、土師器坏1個体が玄室入口付近北壁際と奥壁際北寄り及び南寄りの3ヶ所からいずれも床面直上より出土している。須恵器蓋は口径9~10cmのやや厚手で小形のものと、11.2cm前後の比較的大形のものに分れる。(6)、(10)は口縁部内面に凹線を有し、(6)は天井部外面に範記号「×」をもつ。(8)は口縁部と天井部の境に広く浅い凹窓があり段がつく。坏は口径7.7.5~8.9cmの小形でたちあがりが低いものと、9.5~9.8cmでたちあがりがやや高いものに分れる。(12)はたちあがりが受部より低い。(9)は底部内面にベンガラが付着している。(13)は底部が浅くやや半らである。土師器坏は厚手で口径10.9cmを測る。外面ハケ日、内面にナデ調査を施す。

前庭からは、北壁寄りと南壁寄りの2ヶ所から須恵器蓋2、坏4、長頸壺1と土師器壺片がいづれも茶黄色土層より浮いた状態で出土した。蓋と坏は入子式で出土しており、(3)と(4)、(2)は蓋を下に伏せた状態で、(5)はもう1個の坏を下にして上向きで出土した。蓋は厚手で口径9.9~10.6.5cmを測り、口縁部はやや内湾する。坏は口径8.7~9.9cmを測り、たちあがりが低い。(4)は受部と同じ高さである。(5)は内面にベンガラが付着している。(5)の下の坏はたちあがりがほぼ垂直になる。出土状態からみて、(3)と(4)、(2)とその下の蓋はセットになるものと考えられる。長頸壺は横転した状態で出土した。口径6.5.4cm、胴部最大径13.4cmを測り、肩部にカキ目、体部下半は回転範削り調整を施す。土師器壺は、口縁部から肩部にかけて「く」の字状になり、内面は寛削りにより仕上げている。

(6) 6号横穴墓

本横穴墓は、5号横穴墓の南側に隣接し、西南西に開口している。

この横穴墓は、太平洋戦争時に構築された防空壕により破壊されており、詳細は不明である。

なお、前庭部と考えられる位置の堆積土より石錠（安山岩製）1が出土しているが、前述したように防空壕構築時に土砂が搅乱されているため、本横穴墓に関するものかどうかは不明である。

(7) 7号横穴墓

本横穴墓は6号横穴墓の南側約2.5mに位置し、西南西に開口している。玄室の入口部分の標高は16.2mを測り、東支群では最高所に位置する。羨道の一部と前庭部は崖崩れのため既に崩壊していた。玄室の天井も調査中に頻繁に落盤があり、危険なため充分な調査はできなかった。玄室には2片の凹枝骨片が遺存していた。

玄室の平面プランは台形状を呈し、奥行き155cm、横幅は奥壁付近で173cm、玄室の入口付近で154cmを測る。奥壁は床面から38cmまで外傾し、その後内傾して天井に

至る。前壁は崩壊しており不明である。側壁は内湾して丸い天井に至る。玄室は横断面がアーチ形を呈し、いわゆるカマボコ形と呼ばれる尖井形態を示す。高さは中央部で104cm、奥壁部分で90cmを測る。床面には、奥壁および南側壁にそって排水溝と考えられる、深さ10cm前後の溝を掘り込んでいる。

羨道は前述したように一部崩壊していたため詳細は不明であるが、現存している玄室の入口部分で幅90cmを測る。床面は玄室に向ってゆるやかな登り勾配になっている。玄室に向って幅10cm前後の溝が検出されたが、これは小動物などによる搅乱と考えられる。

前庭は崖崩れのため消失しており不明である。

堆積した土層についてみると、羨道から玄室にかけて黄茶色土層、暗灰黄色土層、黄色土層、黒黄色土層、暗黄色土層が整然と堆積していた。これは閉塞施設の破損に伴い封土が流入し、その後崖崩れのため羨道が崩壊し土砂が流入したものと考えられ、土層による追跡面は確認できなかった。

本横穴墓は遺物が全く検出されなかったため築造時期は不明である。

(18) 8号横穴墓

本横穴墓は7号横穴墓の南側約2mに位置し、西北西に開口している。羨門部分の標高は15.8mを測る。前庭の一部が7号横穴墓と同様に崖崩れにより消失していた。玄室には頭骨片と歯牙が若干遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き190cm、横幅は奥壁付近で178cm、玄室入口付近で168cmを測り、やや縦長の長方形を呈する。奥壁はかなり内傾する。前壁は崩壊しており不明である。側壁は、北側が崩壊しているが、旧状を保つ南側はゆるやかに内湾して天井に至る。玄室は横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入テント形を呈する。高さは、奥壁付近で108cmを測る。玄室入口付近は、一部剥落しているものの南側壁から見て高さ120cm前後になるものと思われる。床面は、周囲に排水溝と考えられる幅10cm前後、深さ4~6cmの浅い溝を掘り込んでいる。

羨道は、長さ220cm、幅は玄室入口付近で120cm、羨門付近で85cmを測り、玄室に向って広がる形状を呈する。側壁は、比較的旧状を保つ南側壁では、床面から40cmまでほぼ垂直に立ちあがり、その後内湾して天井に至る。天井は丸天井が想定される。羨門は、北側が崖崩れのため消失しているが、南側に若干のアクセントをもつ。床面には板材を嵌込んだものと思われる深さ6cm前後の溝が掘り込んでいる。

前庭は、羨門北側から南側入口付近まで消失しており詳細は不明である。現存する部分についてみると、羨門から入口にかけて広がる形状を呈している。側壁は外傾し、南側壁

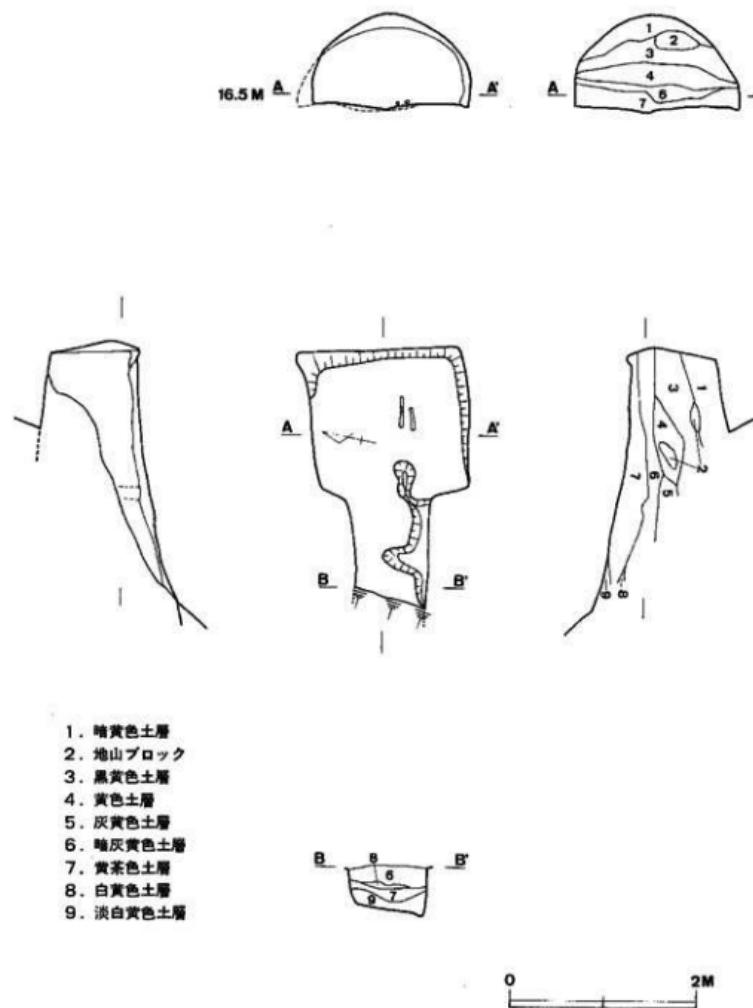


図8 東支群7号横穴墓実測図(%)

は9号横穴墓の北側壁に連なる。床面は玄室に向ってゆるやかな登り勾配となる。

堆積した土層についてみると、羨道から玄室にかけて黄茶色土層、明茶色土層、天井壁崩壊土が整然と堆積していた。これらの土層から追跡の有無は確認できなかった。

玄室の南壁には壁面を掘削調整したと考えられるU字状の痕跡が認められる。奥壁付近では中央より奥壁に向って斜め下方向、中央では下方向に、前壁付近では中央より前壁に向っての横方向及び中央に向って横方向の大きな削りと、前壁と側壁の界線を明確にするための前壁に向って小さな削りが認められる。掘削、調整用工具はいづれも幅が12cm前後である。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室 須恵器 蓋1 坯6

羨道 須恵器 蓋1

玄室からは、奥壁際のやや南より蓋1、坯1個体が、前壁南際より坯5個体が出土している。(2)と(3)以外は全て伏せた状態で出土した。蓋(1)はやや小形で口径10.2cmを測り、天井部には粗いナデ仕上げを施している。坯(2)は口径9.0cmを測り、たちあがりは低い。口縁部と底部の境に一条の回線を有する。(1)とセットになるものと思われる。(3)、(6)は口径9.0～10.1cmを測り、立ちあがりはやや高い。底部外面に梵記号「/」、(6)は自然軸が付着している。(4)、(5)は口径9.0～10.0cmを測り、たちあがりは低い。口縁部と底部の境に浅い回線を有し、底部外面に粗いナデ仕上げを施す。(7)は口径9.2cmを測り、たちあがりは受部より低い。底部内面にヘラ記号「/」、外側は粗いナデ仕上げを施す。

羨道からは、羨門部黄茶色土層より坯1個が出土している。口径は9.0cmを測り、たちあがりはやや高い。外面に白色の自然軸と須恵器片が付着している。

(9) 9号横穴墓

本横穴墓は8号横穴墓の南西側約2mに位置し、北西に開口している。羨門部分の標高は15.5mを測る。玄室北側の中火部に四肢骨の一部が遺存していた。

玄室の平面プランは、奥行き194cm、横幅は、奥壁付近で150cm、玄室入口付近で148cmを測り、継長の長方形を呈する。奥壁はやや内傾して天井に至る。前壁は崩壊しており不明である。天井はかなり崩壊しているが、高さは奥壁部分で90cmを測り、中央部は比較的残りの良い所で94cmを測るので、それに近い数値になるものと思われる。玄室の形態は、奥壁からみて横断面がアーチ形を呈するいわゆるカマボコ形が想定される。側壁はかなり崩壊しており不明である。床面は羨道との境界と考えられる玄室入口部分で高さ12cm前後の段がつく。周囲には排水溝と考えられる幅8～16cm、深さ8cm前後の溝が掘り込まれてい

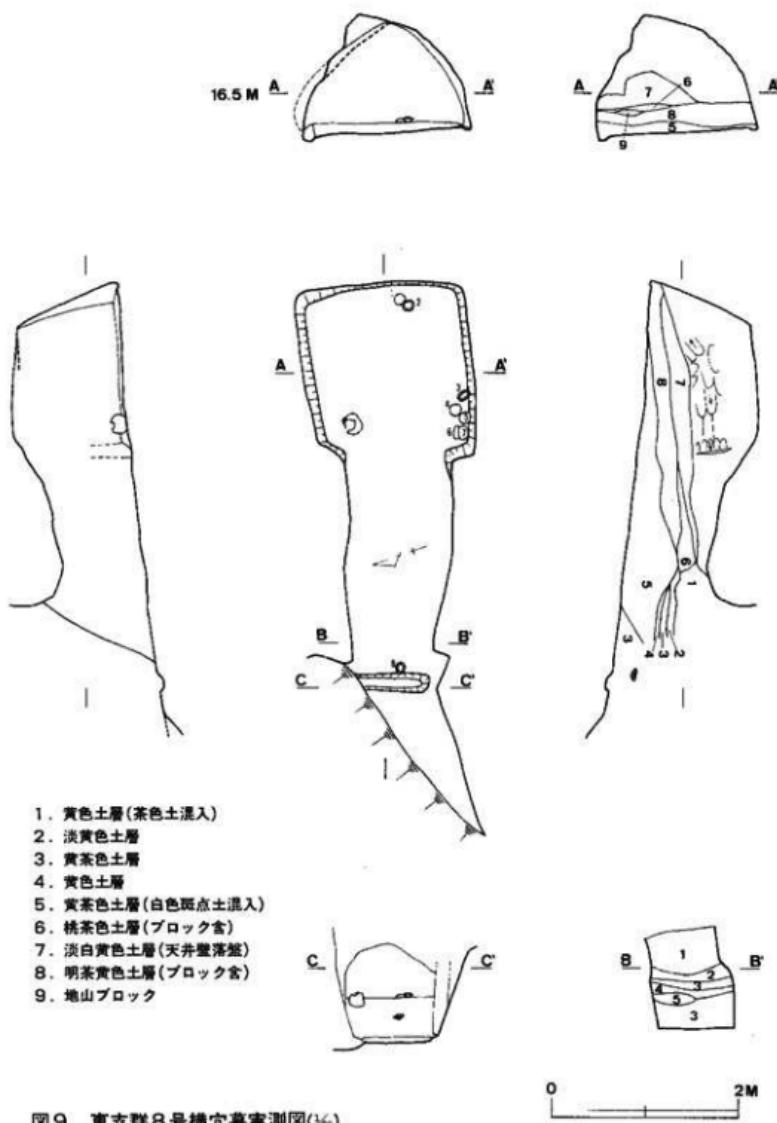


図9 東支群8号横穴墓実測図(36)

る。

羨道は、長さ140cm、幅は玄室入口付近で96cm、羨門付近で84cmを測り、玄室に向ってやや広がる形状を呈する。側壁は床面から50cm位まで垂直気味に立ちあがり、その後内湾する。天井は崩壊しているものの、側壁の形態から高さは玄室入口付近で80cm前後になるものと思われる。天井形態は丸天井が想定される。羨門は単純構造を呈し、閉塞に伴う施設は検出されなかった。

前庭は、長さ120cmと短い。これは、地山がかなり急傾斜になっており、長く掘り込む必要がなかったためと考えられる。幅は羨門付近で116cmを測り、入口部分で広がる。床面は玄室の入口までゆるやかな登り勾配となる。

堆積した土層について見ると、前庭から玄門にかけて黃色土層、茶黃色土層が、玄室には黒茶色土層、黃色土層、淡白黃色土層が整然と堆積しており、土層縦断面からは追跡の有無を確認できなかった。

玄室南壁上部には、壁面を掘削調整したと考えられるU字状の痕跡が僅ながら認められた。いずれも玄門方向から奥壁に向かっての削りであり、奥壁部分では側壁との界線を明確にするための小さな削りとなっている。工具の幅はいずれも10cm前後である。

検出された遺物は次のとおりである。

玄室 銅製品 耳環4

鉄製品 刀子1

須恵器 蓋1 坯2

羨道 須恵器 蓋1

前庭 須恵器 蓋2 坯2 離片1

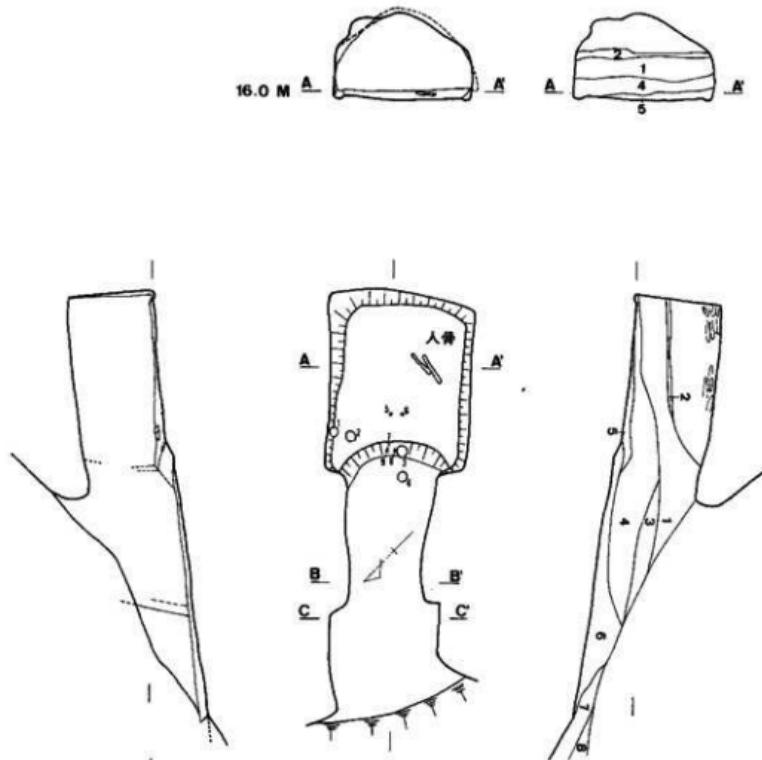
玄室から出土した遺物は、玄門付近の北壁際と中央部からの2か所より出土している。

(1)と(2)は床面直上より、(3)は玄門部についた段の黒茶色土層より出土した。蓋は口径11.2cm、坯は9.4~9.9cmと小形である。天井部及び底部はヘラ切り後粗いナデ調整をしており、技法上の大きな変化は見られない。(1)と(2)はセットになるものと思われる。

銅製品としては、金箔が若干残る耳環4個がいずれも中軸線上の黒茶色土層から出土している。(7)と(8)は玄門部にある段から立った状態で出土した。

鉄製品としては、刀子1が玄門部にある段の黒茶色土層より出土しているが、切先部を欠いている。柄部には木質が若干残存する。

羨道からは、蓋1個が玄門部の茶黃色土層(ブラック含む)より伏せた状態で出土した。



1. 淡白黄色土層(ブロック含)
2. 天井壁落盤土層
3. 茶黃色土層
4. 茶黃色土層(ブロック含)
5. 黑紫色土層(遺物含)
6. 黄色土層
7. 明黄色土層
8. 赤茶色弱粘質土層

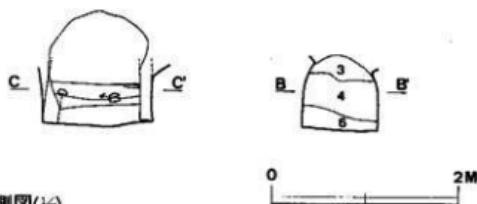


図10 東支群9号横穴墓実測図(%)

口径は11.4cmを測り、玄室出土の須恵器と技法上の大きな変化は見られない。

10 10号横穴墓

本横穴墓は、9号横穴墓の西側約4mに位置し、北々西に開口している。羨道部の標高は14.2mを測る。玄室の天井及び側壁の一部は剥落していたが、本支群の中では比較的保存状態は良好である。

玄室の平面プランは方形を呈し、奥行き178cm、横幅は奥壁付近で168cm、入口付近で180cmを測る。奥壁は、内傾してたちあがり天井に至る。前壁も内傾する。側壁はやや内湾する。大井形態は、横断面が三角形を呈しており、いわゆる妻入テント形を示している。床面は、ほぼ3等分した形で左右に屍床が認められた。これは、床面より6~8cm高くすることにより屍床を明確に浮きあがらせている。なお、東側の屍床には人骨が遺存していた。

羨道は、長さ280cm、幅は玄室の入口付近で95cm、羨門付近で78cmを測り長方形を呈する。側壁は垂直気味に70cmほどたちあがり、その後内湾して天井に至る。高さは玄室の入口付近で82cm、羨門付近で93cmを測る。天井形態は丸天井が想定される。羨門は2重構造で、床面には板材を嵌込んだものと思われる深さ10cm前後の溝が掘り込んである。側壁は45cmまでは垂直にたちあがり、その後外傾する。床面は玄室入口付近までゆるやかな登り勾配となる。

前庭は、長さ144cmと短く、幅は羨門付近で140cm、入口付近で157cmを測る。床面は登り勾配となる。

堆積した土層についてみると、羨道から玄室にかけて白灰黄色土層が14~26cmの厚さで堆積していた。この白灰黄色土層の上に、淡黄色土層、茶色土層、灰褐色土層が堆積している。このことから、初葬時における埋戻し、さらには、その後の追葬が考えられる。つまり、初葬後、白灰黄色土により埋戻しを行ない、追葬時に淡黄色土層を掘削し、その際に、茶色土層および灰褐色土層が流れ込んだものと推定できる。

なお、検出された遺物は次のとおりである。

玄室 須恵器 蓋1 坯2

前庭 須恵器 坯片2 覆片1

上記のとおり、本横穴墓に伴なう遺物は少數である。玄室から出土した蓋(2)は、小形で口径9.5cmを測り、口縁部はやや内傾する。坯(1)は、口径9.5cmを測り、底部外面を回転ヘラ削りにより仕上げている。坯(3)も小形で口径9.1cmを測り、たちあがりは高く、受部はやや上方にのびる。

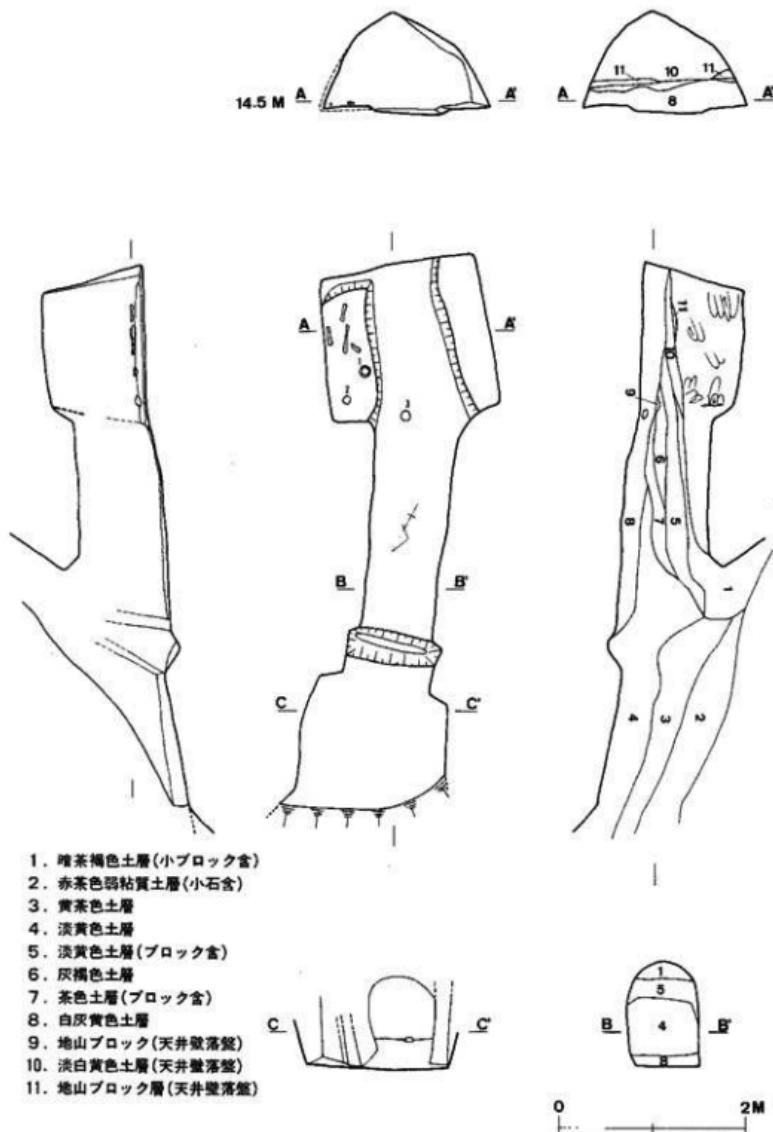


図11 東支群10号横穴塞実測図(%)

前庭の出土遺物は、いずれも淡黄色土層から出土した。

11 11号横穴墓

本横穴墓は、10号横穴墓の西方約3.5mに位置し、北々西に開口している。羨道中央部の標高は13.2mを測る。玄室および羨道はかなり崩壊していた。

玄室の平面プランは方形を呈し、奥行き205cm、横幅は奥壁付近で190cm、入口付近で170cmを測る。奥壁は外傾しているが、前壁は崩壊しており不明である。側壁と天井も崩壊していたため不明である。床面は水分をかなり含んでいた。

羨道は、現存部分で長さ202cm、幅は玄室の入口部分で95cmを測り長方形を呈する。側壁および天井は、崩壊していたため、その形態は不明である。床面は玄室同様に水分をかなり含んでいた。

羨門および前庭は検出されなかった。これは、崖崩れによるものか、あるいは、後述する12号横穴墓のように、初めから羨道と前庭の区別を明確に構築しなかったものかどうかは不明である。

堆積した土層についてみると、羨道部では、黄茶色土層の上に地山崩壊土と思われる白色土層が堆積していた。また、玄室については、淡黄色土層の上に有機質を含んだ灰黑色土層が厚く堆積していた。

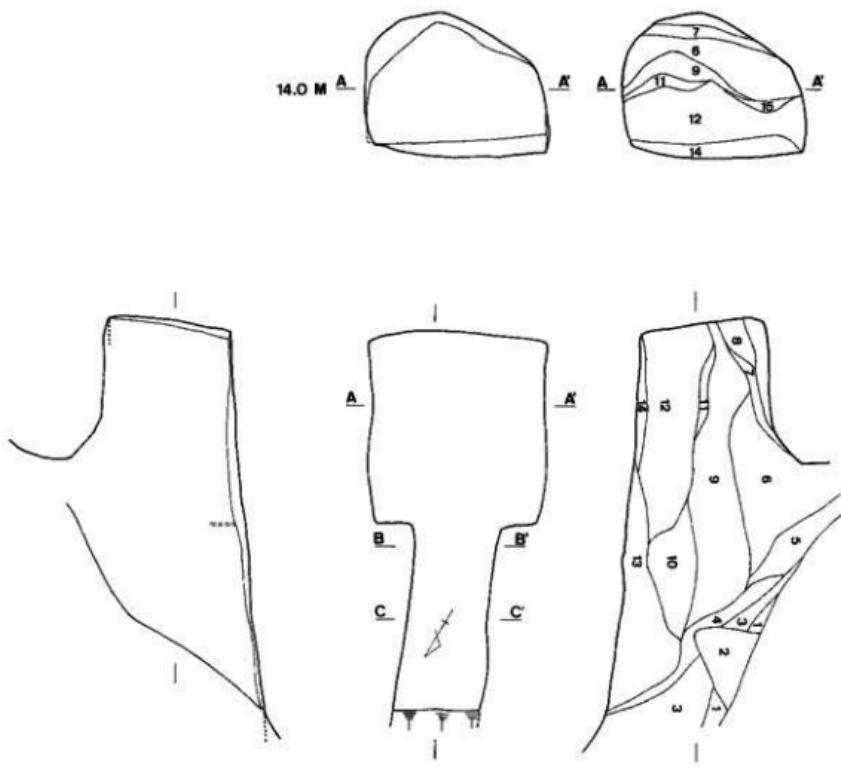
遺物は、黄茶色土層より須恵器甕片が1片出土したにすぎず、本横穴墓の時期判定の資料にはなり得なかった。

12 12号横穴墓

本横穴墓は、南西方向に張り出したU字状の谷の先端部に位置し、北々西に開口している。羨道部分の標高は12.9mを測る。玄室の側壁および天井はかなり崩壊していた。

玄室の平面プランは、やや崩壊のある方形を呈し、奥行き120cm、横幅は奥壁付近で108cm、入口付近で118cmを測り、規模は本文群中最小である。天井、奥壁および前壁は崩壊しているためその形態については不明瞭である。側壁は、中央部分で、堆積していた土層より40cm前後までは垂直気味にたちあがると推測できるが、その上部は不明である。床面は、入口部分で羨道との境界であると思われる高さ10cm程の段がみられる。なお、玄室から前庭に至る床面は、かなりの水分を含んでいた。このことから、床面に認められた凹凸は、浸水および風化作用によるものと推測できる。

羨道と前庭の境は、平面プランでも、あるいは、堆積した土層でも確認できないため、側壁に残る界線によって一応の目安とした。それによれば、羨道は長さ58cm、幅は玄門部分で65cm、羨門部分で60cmを測り方形を呈する。側壁は崩壊しているものの、比較的旧状



1. 表土層
2. 捩乱
3. 茶黃色土層
4. 黃黑色土層
5. 黃黑茶色土層
6. 茶色土層(小ブロック含)
7. 天井盤落盤土層
8. 地山ブロック
9. 黄桃色土層
10. 白黄色土層(ブロック含)
11. 灰茶色土層(ブロック含)
12. 灰黑色土層(ブロック含)
13. 黄茶色土層
14. 淡黄色土層
15. 白灰色土層

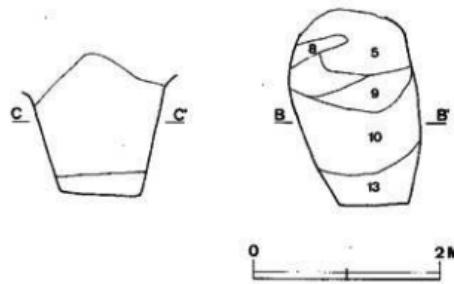


図12 東支群11号横穴墓実測図(%)

を保つ部分では、東側壁はやや外傾し、西側壁は内湾する。天井は崩壊しており、その形態は不明である。閉塞に関する施設は確認できなかった。

前庭は、長さ200cm、幅は45~60cmを測り、奥門に向ってやや広がる細長い形状を呈する。側壁についてみると、西壁は外傾するが、東壁は高さ46cmまで外傾し、その後扇曲して平坦面を形成するが、その後再び外傾し、隣接する11号横穴墓の羨道（前庭）の西壁に連なる。床面は玄室に向って登り勾配となる。なお、前庭部東側の高さ40~55cmのところに幅23~35cm、長さ150cmの長方形で性格不明の平坦面が確認された。

次に、堆積した土層についてみると、前庭から奥門付近まで茶灰色土層が、その上に暗茶褐色土層、白灰色土層（天井および側壁崩壊土）が玄室奥までは平らに堆積し、これらの土層を前庭部中央付近で遮るように、茶色粘質土層、桃茶色土層が堆積していた。このことから、追葬が行われたと推測できる。つまり、茶灰色土層および暗茶褐色土層を掘削し、追葬を行った後に天井および側壁が崩壊し、さらには土砂流入があったと考えられる。

本横穴墓に伴う遺物は全く検出されなかった。

03 出土遺物

土器 ここでは、須恵器の蓋と坏の形態の変化と技法上の特徴から下記の6つに分類した。分類番号は前回報告した西支群のI類からV類をそのまま利用し、新たな特徴をもつものはVI類以降を追加することにする（註1）。土器の詳細については、後掲に「出土土器観察表」を附したので参照されたい。

東支群の蓋坏は下記のII類からVII類に分類した。

【II類】 蓋3号（図版2-1・2）、4号（図版4-3）、9号（図版6-1）

蓋の天井部と口縁部との境は、不明瞭でわずかに凹線でそれとわかる程度である。天井部はやや平坦で、外面はヘタ切り後に指ナデ調整が施してある。

【III類】 蓋1号（図版1-1）、2号（図版1-9-11・15）、3号（図版2-3～6）、4号（図版4-1）、5号（図版4-13～16）、8号（図版5-12）、9号（図版6-2～4）、10号（図版6-9）、坏1号（図版1-4）、2号（図版1-17・18）、3号（図版3-1～6）、4号（図版4-5～8）、5号（図版5-1～8）、8号（図版5-15～19）、9号（図版6-5～8）、10号（図版6-10・11）

蓋坏とともに口径が10cm前後のものが多く、器形の矮小化が著しい。蓋の大井部は丸味を帯び、口縁部は直行、外反、内湾など一定していない。坏は口縁部のたちあがりが短く

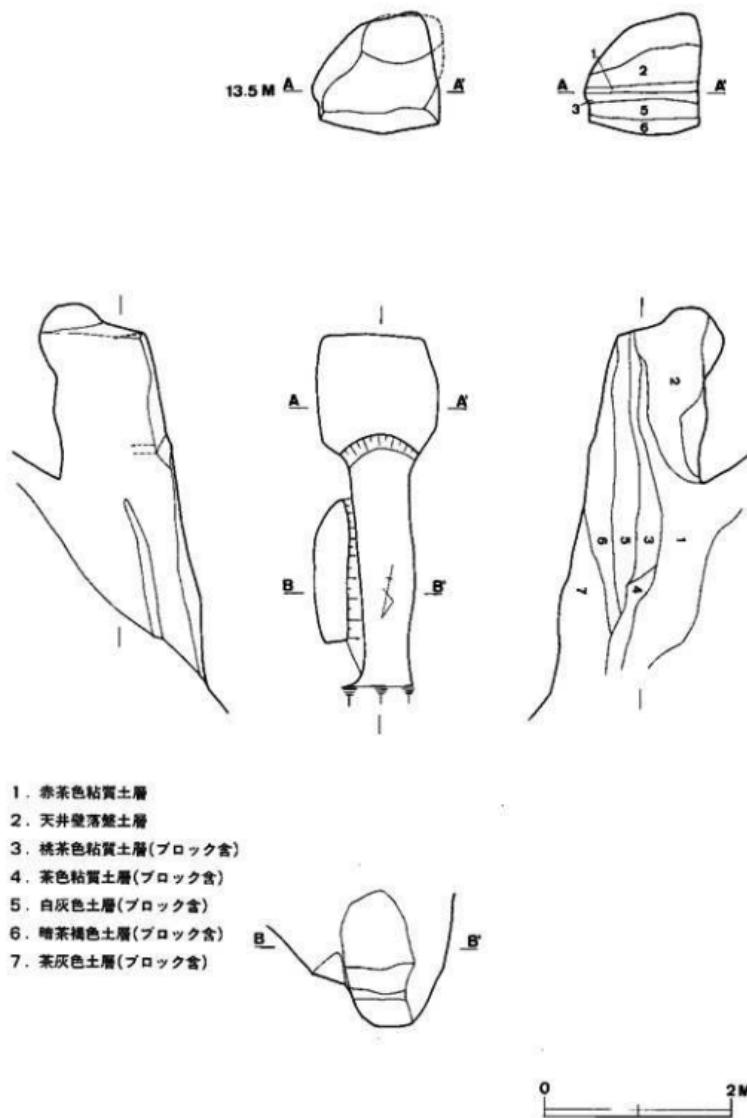


図13 東支群12号横穴墓実測図(%)

中には受部端上面より低いものもある。蓋坏ともに口径が10cm以下のものは、大きさの割に器壁が厚い。調整は〔II類〕と同様であるが、全体的に粗雑である。

【IV類】 蓋1号(図版1-3)、2号(図版1-12・13)、3号(図版2-9・10・12)、坏1号(図版1-5)、3号(図版3-7)

蓋では(図版2-9)以外はすべて破片である。破片は、天井部に輪状のつまみを有するものと、口縁部の内面にかえりのあるものに分けられる。(図版2-9)は、口径16.6cmの大形で、輪状のつまみを有する天井部は丸味をもち、外面にはヘラ削りを施してある。口縁部の内面のかえりは、口縁端部よりも下方へのびている。坏は、内湾する口縁部をもち、高台は直線的にやや外傾し、端部に面をもつものと、外傾し端部が丸いものとの2形態がある。

【V類】 蓋3号(図版2-13、3-11)

短頸壺の蓋と考えられる。2個ともに小形品である。(図版2-13)は、ヘラ削りの施してある天井部と、口縁部の境に深い沈線が見られる。全体的には、古い様相を呈しており、稜のしっかりした丁寧な作りである。(図版3-11)は、天井部にヘラ削りが施してあるが、口縁部との境は不明瞭で、全体的には、やや簡略にした感がある。

【VI類】 蓋3号(図版2-7・8)、坏4号(図版4-2・4)

蓋坏ともに小形品である。蓋は、乳頭状のつまみを有し、天井部の外面にはヘラ削りが施してある。口縁部の内面のかえりは、口縁端部より下方へのびている。坏は、底部が平らで、外面には回転ヘラ切りで未調整の痕跡をとどめている。

【VII類】 蓋1号(図版1-2)、3号(図版2-11)、坏1号(図版1-6)、3号(図版3-8)

蓋は、やや平らな天井部に外傾する輪状のつまみを有し、口縁部の内面はかえりが無く、端部を下方に引き出している。坏は、外方へ大きくたちあがる口縁部をもち、高台は、外傾し端部が丸いものと、高くて端部が鋭いものとの2種類がある。

以上、各類の特徴を概括した。これを横穴墓ごとに整理すると次のようになる。

〔II類〕 3・4・9号横穴墓

〔III類〕 1・2・3・4・5・8・9・10号横穴墓

〔IV類〕 1・2・3号横穴墓

〔V類〕 3号横穴墓

〔VI類〕 3・4号横穴墓

〔VII類〕 1・3号横穴墓

また、上記の分類を陶邑の須恵器編年におけると次のようになる(註2)。

- (II類) II型式第5段階
- (III・V類) II型式第6段階
- (IV・VI類) III型式第1段階
- (VII類) IV型式第1段階

これは、山陰の須恵器編年ではIV期に属し、7世紀前半以降ということになる(註3)。

その他の遺物 上器以外の出土遺物は質量とともに貧弱で、銅製品には耳環7、鉄製品には刀子3、玉類には勾玉1、石製品には石鏡1が出土している。

耳環は、いずれも銅芯に金を貼り付けているが、剝の腐食により金の残存状況は良くない。4号横穴墓から3個体の出土がある。(図版4-10)は、長径1.8cm、短径1.7cm、内径1.0cmで、間隙は1.0mmを測る。断面は楕円形で、長径0.55cm、短径0.4cmを測る。(図版4-11)は、長径2.2cm、短径2.1cm、内径1.3cmで、間隙は0.7mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.5cmを測る。(図版4-12)は、長径2.2cm、短径2.1cm、内径1.3cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.8cm、短径0.5cmを測る。なお、(図版4-10)は、頭蓋骨の側頭部に密着して出土したものである。

9号横穴墓からは4個体が出土している。(図版6-12)は、長径2.2cm、短径2.0cmで、間隙は3mmを測る。断面は楕円形で、長径0.7mm、短径0.5cmを測る。(図版6-13)は、長径1.8cm、短径1.7cm、内径1.1cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.6cm、短径0.4cmを測る。(図版6-14)は、長径1.9cm、短径1.8cm、内径1.1cmで、間隙2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.6cm、短径0.35cmを測る。(図版6-15)は、長径2.3cm、短径2.1cm、内径1.35cmで、間隙は2mmを測る。断面は楕円形で、長径0.6cm、短径0.45cmを測る。

刀子(図版1-19)は、2号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ7.5cm、身幅1.2cm、棟幅0.6cmを測る。刀身の先端は欠損し、柄部には木質が残る。(図版3-9)は、3号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ6.3cm、身幅1.0cm、棟幅0.3cmを測る。刀身の基部以下が欠損している。(図版4-9)は、4号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ3.6cm、身幅0.8cm、棟幅0.3cmを測る。刀身の基部以下が欠損している。(図版6-16)は、9号横穴墓から出土している。現存部分は、長さ5.5cm、身幅1.2cm、棟幅0.4cmを測る。これも刀身の基部以下が欠損している。

勾玉は長さ4.1cm、径0.9cmを測り、穿孔は一方からで、長径0.3cm、短径0.28cmを測る。めのう製で、乳白色に一部橙色が混じる。3号横穴墓出土である。

石鎌は安山岩質で、両側縁が二等辺を呈し、わたりの深い凹基式である。長さ2.6cmの完成品で、6号横穴墓下方出土である。

(註1) 『平野横穴墓群発掘調査報告書I』(斐川町教育委員会・1983年)

(註2) 『陶邑Ⅲ』(大阪府教育委員会・1978年)

(註3) 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』・1971年)

出土土器観察表

表1

器種 番号	器種 番号	出 数 写真番号	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
横 穴 墓	蓋 (蓋)	1-1 23-1	口径：10.8 器高：3.8	口縁部はやや内湾し、端部は丸い。 天井部は平坦。	天井部はヘラ切り後粗い仕上げ。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 色調：黄灰色 焼成：やや不良 口縁部に列点文 表裏部出土
	環状 つまみ 付 蓋	1-2 23-5	口径：14.7 器高：2.2	大形で環状のつまみをもつ。天井部はほぼ水平で、ゆるやかに内傾しながら口縁部にいたる。 口縁部は外反し、端部は丸く、かえりをもたない。	回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 色調：黄灰色 焼成：普通 前庭部堆積土出土 一部外面に線軸付 着 1/2残存
	蓋	1-3 23-4	口径：14.6	大形で、口縁部内面にかえりをもつ器高の低い蓋。 口縁部に一条の凹線をもち、端部は丸い。 つまみの有無は不明。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗（3mm以下の砂粒含む） 色調：淡青灰色 焼成：良好 表裏部出土 4個の破片1/2残存
	蓋 (身)	1-4	口径：9.7 受部径：11.7	内傾するたちあがりは低く、端部はやや丸い。受け部は斜め上方へのび端部は丸い。 底部は丸味をもつ。	底部外面はヘラ切り後ナデ仕上。内面は仕上げナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 色調：灰色 焼成：良好 前庭部堆積土出土 1/2残存
	高台付坪	1-5 23-2	口径：12.5 器高：4.6	口縁端部は丸く、やや内湾しながら底部にいたる。底部は平坦で低い台がつく。	体部を整形し、ヘラ切り後高台をつける。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗（3mm以下の白色砂粒含む） 色調：暗灰色 焼成：良好 前庭部堆積土出土

表2

器種	回収番号 写真番号	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
高台付坪 号	1-6 23-3	口径：13.7 基高：5.3	口縁端部は丸く、やや内凹しながら底部にいたる。口縁部から底部にかけて3条の凹線をもつ。底部はやや丸い。高台は端部を丸くおさめる。	体部外側がへラ切り。他は回転ナデ。底部内面は不定方向ナデ仕上。体部整形後高台をつける。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗（3mm以下の白色砂粒を含む） 色調：黄灰色 焼成：やや不良 製造地積土出土 胎土のみ残存
横 六 蓋	1-7 23-6	脚底径：6.7 残存高：5.3	基部から外沿気味にト外方に下り、中央部に一条の沈線を有する。 端部上面に棱をもつ。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 色調：灰褐色 焼成：良好 前庭堆積土出土 脚部のみ残存
通 1-8 23-7	口径：13.4	口縁部は、外反したのち屈曲して再び外上方へのびる。端部は丸い。 体部には、円孔スカシ（径1.5）と2条の沈線を有する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 口縁部1/4、脚部1/4 残存	
蓋 坪 (蓋)	1-9 23-9	口径：8.9 器高：3.5	小形。口縁部はやや内湾し、端部は丸い。 天井部は丸味をもつ。	天井部外側へラ切り後粗いナデ。内面は不定方向のナデ。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
蓋 坪 (蓋)	1-10 23-11	口径：10.5 基高：4.0	口縁部は内湾し、端部は丸い。 天井部はやや丸い。	天井部へラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄門部堆積土出土 一部に黒色自然釉付着
蓋 坪 (蓋)	1-11 23-10	口径：10.4 器高：3.8	口縁部は内湾し、端部は丸い。 天井部はやや丸味をもち、一条の低い棱をもつ。	天井部外側へラ切り後粗いナデ。内面は不定方向仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗（3mm以下の白色砂粒、黒粒含む） 焼成：普通 色調：灰色 前庭堆積土出土 天井部外面にヘラ記号「X」
塊状 つまみ付 蓋	1-12 23-14		外側するつまみは端部を丸くおさめる。 つまみの中央に凸部がある。	天井部外側回転ナデ。 内面不定方向ナデ仕上。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 天井部1/4残存
蓋	1-13 -	口径：12.0	口縁部はやや内湾し、端部の近くで屈曲して水平にのびる。端部は丸く、内側にかえりを有する。 かえりの端部はやや丸味を有する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡灰色 前庭堆積土出土 口縁部1/4残存

表3

器種	出典番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
二号横穴墓	壺 1-14 23-8	体部最大径： 15.2	体部に4条の凹線を もち、最大径はほぼ 中位に求められる。	体部下半分までヘラ 削り。他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 体部から底部にか けて少残存
	蓋 坏 (蓋) 1-15 23-12	口径：11.2 器高：4.35	口縁部は内凹し、端 部はやや鋸い。内面 に指による浅い凹線 を有する。 天井部はやや丸い。	天井部はヘラ切り後 ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：黄灰色 前庭堆積土出土 少残存 黄黒色の自然釉付 着
	蓋 坏 (蓋) 1-16 23-13		天井部はほぼ平らで、 内面に指による浅い 凹線をもつ。	天井部外面ヘラ切り 後粗いナデ仕上。 内面は指による不定 方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 天井部のみ少残存 天井部外面にヘラ 記号「X」
六号横穴墓	蓋 坏 (身) 1-17 23-15	口径：7.85 受部径：9.5 器高：2.7	たちあがりは低く内 傾し、端部はやや鋸 い。受部はやや斜め 上方にのび端部は丸 味を有する。 底部は丸い。	底部ヘラ切り後ナデ 仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄門部出土 外面1/4に灰釉付着
	蓋 坏 (身) 1-18 23-16	口径：9.45 受部径：11.55 器高：3.4	たちあがりは、外湾 気味に内傾し端部は やや鋸い。 受部は外上方にのび 端部は丸味を有する。 底部は深く丸い。	底部外面ヘラ切り後 ナデ仕上。内面は指 による不定方向ナデ 仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 外面1/4に淡緑色の 自然釉付着
三号横穴墓	蓋 坏 (蓋) 2-1 —	口径：13.8 (推定)	口縁部は内凹し、端 部は丸い。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 口縁部少残存
	蓋 坏 (蓋) 2-2 —	口径：10.1 器高：3.6	口縁部はやや内凹し、 端部は丸味を有する。 天井部は平ら。	天井部外面ヘラ切り 後粗いナデ。内面は 一方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭堆積土出土 少残存
	蓋 坏 (蓋) 2-3 24-2	口径：11.25 器高：4.6	口縁部はやや内凹し、 端部は丸い。 天井部は深く丸味を 有する。 天井部と口縁部の間 に指による広い凹線 をもつ。	天井部外面ヘラ切り 後ナデ。内面は不定 方向の仕上ナデ。 他は、回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：粗 6mm以下の砂粒 含む 焼成：普通 色調：白灰色 玄室出土

表4

器種	回収番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考	
三 分 横 六 原	蓋 环 (蓋)	2-4 24-1	口径：11.4 器高：3.5	口縁部は、やや内傾し端部は丸味を有する。天井部はやや浅く平ら。	天井部外側へラ切り後削り調整。内面は指によるナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 表土出上
	蓋 环 (蓋)	2-5 24-3	口径：11.5 器高：3.8	口縁部はやや内窪し、端部は丸味を有す。内面に浅い回線と外側にさかに棱を有する。天井部はやや平ら。	天井部外側へラ切り後削り調整。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：やや粗 3mm以下の砂粒 を含む 焼成：普通 色調：灰色 前庭堆積土出土
	蓋 环 (蓋)	2-6 24-4	口径：11.5 器高：3.8	口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。天井部はやや深く、丸味を有する。口縁部に浅い凹窪と、天井部との境に深い凹窪を一条ずつ有し、段がつく。	天井部内面不定方向ナデ仕上。外側は灰釉付着のため不明。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室掘立坑出土 天井部外側に灰釉 付着。 天井部外側にヘラ 記号「X」 口縁部にヘラ等に よる文様 %残存
横	蓋	2-7 24-5	口径：8.1 口縁部径： 器高：3.55	小形で、乳頭状のつまみと内側にかえりをもつ蓋。口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。天井部はやや丸味を有する。	天井部回転ヘラ削り後乳頭状のつまみをつけ、回転ナデによる調整。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
	蓋	2-8 -	口径：7.1 口縁部径：7.5 器高：3.0	小形で、乳頭状のつまみをもつものと考えられる。口縁部は外傾し、端部は丸味をもつ。天井部はやや平ら。	天井部回転ヘラ削り。他は回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：青灰色 前庭堆積土出土 %残存 天井部外側に灰釉 付着
六 原	蓋	2-9 24-6	口径：16.6 口縁部径： 器高：3.3	かえりをもつ大形品で環状のつまみを有する。口縁部はやや外傾し、端部は丸い。天井部はやや丸味を有し、口縁部との中間に指による浅い凹窪を一条もつ。	天井部外側回転ヘラ削り。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 %残存
	蓋	2-10 -	口径：12.4 (推定) 口縁部径： (推定)	つまみを有する蓋と考えられ、かえりをもつ。端部を丸くおさめた口縁部はやや内窪しながら天井部にいたる。	天井部外側回転ヘラ削り。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 %残存

表5

器種番号	器種	図版番号 写真番号	法 cm	形態	技 法	備 考
三 号	蓋	2-11 24-7	口径：15.2 (推定) 器高：2.1	大形品で環状のつまみを有する。 端部を下方にほぼ垂直に屈曲させた口縁部はゆるやかに内湾しながら天井部にいたる。 天井部は平ら。	天井部外面は1/6位まで回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：暗青灰色 前庭堆積土出土 1/6残存
	蓋	2-12 —	口径：11.8 (推定)	かえりをもつ瀧。 口縁部は端部を丸くおさめる。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土 1/6残存 外面に自然釉付着
	蓋	2-13 24-13	口径：8.6 器高：3.3	口縁部はやや内傾し、外面に一条の沈線を有する。端部はやや鋸い。 天井部はやや丸味を有し、口縁部との境に一条の沈線を有する。	天井部回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
横 穴	低脚付坏	2-14 —	口径：6.9 (推定) 器高：5.2	坏部はほぼ垂直にのび、端部はやや丸味を有する。 底部は深くやや平ら。 低い脚は内傾した後下外方にのびる。	坏底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭堆積土出土 1/6残存
	高 坏	2-15 25-7	口径：8.7 器高：10.0 脚底径：6.6	坏部はやや外傾し、口縁端部はやや鋸い。 底部は平ら。 脚部は基部が細く外反して下り、端部近くで段を成し、下方に屈曲する。 脚部上段三角形二方向、下段長方形二方向のスカシをもつ。	坏底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 外部内部に灰釉付着
基	底	2-16 25-1	口径：7.5 器高：9.1 体部最大径： 6.8	外反する口頭部は、上方のところで外方へ出曲し、さらに外上方へのびる。端部は丸い。口縁部の中央に2条の沈線をめぐらす。体部最大径は体部と脚部の間にある。ほぼ中央に円孔スカシ(径1.3)をもつ。体部に2条の沈線を有する。	底部より体部1/6位まで回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土

表 6

器種番号	器種	図版番号 写真番号	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
二 類	長頸壺	2-17 24-15	口径：8.5 器高：21.1 体部最大径： 14.9	口頸部は外反して上方にのび、頸部の中央に6条の沈跡をめぐらした後、内窓気味にのびる。口歯端部は丸い。 肩部はゆるやかに内窓する。体部はほぼ中央に最大径をもつ。底部は平ら。	底部より体部迄まで回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土。 口縁部及び胴部の一部欠損
	短頸壺	2-18 24-8	口径：6.3 器高：12.45 体部最大径： 14.2	外反して上方にのびる口頸部は短かく口歯端部は平面をなす。肩部はゆるやかに内窓する。体部上半に最大径をもつ。 底部は丸味をもち、やや不安定。	底部より体部迄まで回転ヘラ削り。他は回転ナデ。 ロクロ右回転。 肩部にカキ目文様。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土。 肩部基部から肩部にかけて灰釉付着
	長頸壺	2-19 —	口径：6.2 (推定)	口頸部はやや内窓する。 端部はやや鋭い。	回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭堆積土出土。 口縁部のみ残存。
三 類	蓋 (身)	3-1 24-10	口径：9.9 受部径：12.5 器高：3.3	内傾するたちあがりは低く、端部はやや丸い。受部は外上方へのび端部は丸い。 底部はやや平ら。	底部回転ヘラ切り後 ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：やや不良 色調：白灰色 玄室出土。
	蓋 (身)	3-2 24-11	口径：10.0 受部径：12.6 器高：3.6	内傾するたちあがりは低く、端部は鋭い。受部はやや外上方へのび端部を丸くおさめる。 底部は丸い。	底部回転ヘラ切り後 粗いナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 灰道出土。 口縁一部欠損
	蓋 (身)	3-3 —	口径：9.2 受部径：11.4 器高：4.7	内傾するたちあがりは端部を丸くおさめる。 受部は外上方へのび端部は丸い。 底部は丸味をもつ。	底部回転ヘラ切り後 ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 前庭堆積土出土。 弓残存
穴 基	蓋 (身)	3-4 —	口径：9.4 受部径：11.5 器高：3.4	やや外反するたちあがりは、端部を丸くおさめる。 受部は、ほぼ水平にのび、端部は丸い。 底部はほぼ平ら。	底部外面ヘラ切り後 ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：粗 5mm以下の砂粒 含む 焼成：普通 色調：淡灰色 玄室出土。
	蓋 (身)	3-5 24-9	口径：8.9 受部径：11.1 器高：3.5	内傾するたちあがりは高く、端部は鋭い。 受部はやや外上方へのび、端部はやや丸い。 底部は深く平ら。	底部外面ヘラ切り後 ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 玄室出土

表7

部品番号	器種	出版番号 写真番号	法量 (cm)	形態	技法	備考
三 号 横	蓋 壺 (身)	3-6 —	口径: 8.9 受部径: 11.3	内傾するたちあがりは端部が丸い。 外上方にのびる受部は端部を丸くおさめる。	回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 疎密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭堆積土出土 口縁部1/4残存
	高台付壺	3-7 —	口径: 13.2 (推定) 器高: 4.6	端部を丸くおさめた 口縁部はゆるやかに内湾しながら底体部にいたる。 高台は外反し、端部は丸味を有する。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 灰色 前庭堆積土出土 1/4残存
	高台付壺	3-8 24-14	口径: 13.8 器高: 4.45	口縁部は、端部を丸くおさめ、やや内湾しながら底体部にいたる。 高台は、やや外湾し突堤状の段がつく。 端部はやや丸い。	底部外面ヘラ切り後 ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: やや粗 3mm以下の白色 砂質と黒紋合む 焼成: やや不良 色調: 淡灰色 前庭堆積土出土
四 号 横	蓋	3-11 25-11	口径: 8.6 器高: 3.25	無縫蓋の蓋。 口縁部の端部は丸く内傾しながら天井部にいたる。 天井部はやや丸い。	天井部外面回転ヘラ削り。 他是回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭堆積土出土 口縁一部欠損
	無縫蓋	3-12 25-12	口径: 7.5 体部最大径: 10.6 器高: 5.45	小形の蓋。 口縁部はやや外反し端部は続い。 体部は大きく内湾する。 底部は中心に向ってやや内湾する。	底部外面回転ヘラ切り未調整。 他是回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 前庭部堆積土出土 底部内面にベンガラが付着
	蓋	3-13 25-6		頸部は外傾し、1条と2条の沈線と相互して2段の波状文を有する。	頸部回転ナデ。肩部 外面タタキ目(2× 2.5cm 7条)。内面 アテ木口(半径 2.5 cm, 5~6条)。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 前庭部堆積土出土 頸部から肩部にかけて1/4残存
五 号 横 穴	小形高壺	3-14 25-13	口径: 8.4 器高: 5.65	外傾してたちあがる 壺部の口縁端部は丸味を有する。底部は平ら。 脚部は短く、下半は「ハ」の字状に盛があり、端部は面をなす。	壺部底部回転ヘラ切り後脚部作成。壺部 内面底部は仕上ナデ。 他是回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭部堆積土出土 1/4縁部1/4欠損
	蓋	3-15 —	口径: 17.6 (推定)	外反する口縁部は複合口縁で、一条の凹線を有し、端部は丸い。	回転ナデ。 ロクロ回転方向不明。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 暗灰色 前庭部堆積土出土 口縁部から頸部にかけて1/4残存

表8

測定番号	器種	回収番号 写真番号	法 量	形 態	技 法	備 考
四 号	平版	3-16 -	胸部最大径： 14.9	ゆるやかに下る肩部 は、2個の突起と1 条の凹線をもつ。 体部は最大径を上部 にもち、下半に1条の 凹線を有する。	底部から体部先まで 回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭部堆積土出土 胸部のみ残存
	蓋坏 (蓋)	4-1 25-2	口径：10.1 器高：3.4	口縁部はやや内湾し 端部は丸い。天井部 との境に一条の沈線 をもつ。 天井部は一条の広く 浅い凹線により段が つく。	天井部外面へラ切り 後仕上ナデ。内面不 定方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
	坏	4-2 25-4	口径：7.8 器高：2.8	口縁部は端部を丸く おさめ、半球気味に 底部にいたる。 底部は平ら。	底部外面回転ヘラ削 り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土
横 穴	蓋坏 (蓋)	4-3 25-3	口径：12.4 器高：4.3	口縁部は端部を丸く おさめ、やや内湾し ながら天井部にいた る。 天井部は、一条の広く 浅い凹線により段が つく。	天井部外面回転ヘラ ナデ仕上ナデ。内 面にあて木賽がのこ る。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗 焼成：普通 色調：青灰色 前庭部出土 口縁部一部欠損 天井部外面へラ記 号「×」
	坏	4-4 25-5	口径：9.5 器高：3.15	口縁部は端部が鋭く 内傾しながら底部に いたる。 底部は平ら。	底部外面回転ヘラ削 り。内面仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土
	蓋坏 (身)	4-5 25-8	口径：8.4 受部径：10.7 器高：3.2	内傾するたちあがり は端部が鋭い。斜め 上方にのびる受部は 端部を丸くおさめる。 底部はやや丸味を有 する。	天井部回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青灰色 玄室出土 外面の8割に自然 釉付着
裏	蓋坏 (身)	4-6 -	口径：7.2 受部径：9.4 器高：2.6	小形の坏、内傾する たちあがりは低く、 端部は丸い。斜め上 方にのびる受部は端 部を丸くおさめる。 底部はやや丸味をもつ。	底部外面へラ切り後 ナデ仕上。内面ナデ 仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 美道部出土 底部外面にへラ記 号「！」
	蓋坏 (身)	4-7 25-9	口径：10.6 受部径：13.3 器高：3.5	内傾するたちあがり は低く、端部はやや 鋭い。斜め上方にの びる受部は端部を丸 くおさめる。口縁部 に一条の凹線をもつ。 底部は深く平ら。	天井部外面へラ切り 後、粗いナデ。内面 は不定方向ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗青灰色 前庭部出土 底部外面へラ記号 「×」
	蓋坏 (身)	4-8 25-10	口径：10.2 受部径：12.6 器高：3.2	内傾するたちあがり は低く、端部は鋭い。 斜め上方にのびる受 部は端部を丸くおさ める。底部はほぼ平ら。	天井部外面へラ切り 後ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：やや粗 焼成：普通 色調：暗青灰色 美道部出土 底部外面へラ記号 「×」

表 9

器種	器種	写真番号	法身	形態	技法	備考
五 号 横 穴 裏	蓋 坯 (蓋)	4-13 26-1	口径: 9.0 器高: 3.3	小形。口縁部はやや内湾し、端部は丸い。内面に一条の凹線をもつ。天井部は丸味をもつ。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ仕上。内面不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: やや粗 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出上 底部外面ヘラ記号「X」
	蓋 坯 (蓋)	4-14 26-4	口径: 10.0 器高: 3.9	口縁部は内湾し、端部は丸い。内面に一条の凹線を有する。天井部との境に一条の浅い凹線を有する。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出上
	蓋 坯 (蓋)	4-15 26-3	口径: 9.9 器高: 3.5	口縁部はやや内湾し、端部は丸い。天井部との境に浅い凹線を有する。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り後ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭部堆積土出上
	蓋 坯 (蓋)	4-16 26-5	口径: 11.2 器高: 4.15	口縁部は内湾し、端部は丸い。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: やや粗 焼成: 普通 色調: 淡青灰色 玄室出上 口縁一部欠損
	蓋 坯 (蓋)	4-17 26-6	口径: 11.25 器高: 4.0	口縁部は内湾し、端部は丸味を有する。天井部との境の広く浅い凹線により段がつく。天井部はほぼ平ら。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面は不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 粗 焼成: 普通 色調: 黄灰色 玄室出上
	蓋 坯 (蓋)	4-18 26-2	口径: 10.65 器高: 3.8	やや厚手。口縁部はやや内湾し、端部は丸い。天井部は丸味を有する。	天井部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 前庭部堆積土出上
蓋 坯 (身)	蓋 坯 (身)	5-1 26-13	口径: 9.5 受部径: 12.2 器高: 3.75	内傾するたちあがりは、端部が鋭く内面に一条の沈線を有する。外上方にのびる受部は端部が丸い。底部は深くやや丸味をもつ。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。内面不定方向ナデ仕上。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青緑灰色 玄室出上 底部内面にベンガラが付着
	蓋 坯 (身)	5-2 26-14	口径: 9.8 受部径: 12.0 器高: 3.1	内傾するたちあがりは、端部が鋭く内面に一条の沈線を有する。斜め上方にのびる受部は端部が丸い。底部に一条の凹線を有する。底部はやや平ら。	底部外面回転ヘラ切り後粗いナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: やや粗 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄室出上

表10

器種	器種	回収番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
五 号 横 穴	蓋 坯 (身)	5-3 26-11	口径：9.9 受部径：11.7 器高：3.7	はば直立するたちあ がりは端部が丸く、 内面に一条の沈線を 有する。 外上方にのびる受部 は端部がやや鋭い。 底部は深く丸い。	底部外向回転ヘラ切 り後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：相 焼成：良好 色調：青灰色 前庭出土
	蓋 坯 (身)	5-4 26-9	口径：8.7 受部径：11.0 器高：3.2	内傾するたちあがり は低く、受部とはほ 同じ高さ、端部は鋭 い。 外上方にのびる受部 は端部が丸い。底部 は深く丸い。	底部外向回転ヘラ切 り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：暗灰色 前庭部堆積土出土 底部外面の一部に 自然釉付着
	蓋 坯 (身)	5-5 26-13	口径：8.9 受部径：11.15 器高：3.1	内傾するたちあがり は受部より低く、端 部は鋭い。 斜め上方にのびる受 部は端部が丸い。 底部は丸い。	底部外向回転ヘラ切 り。内面仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土 外面7割に自然釉 (白色)付着
	蓋 坯 (身)	5-6 26-10	口径：8.6 受部径：11.1 器高：3.65	内傾するたちあがり は低く、端部は鋭い。 斜め上方にのびる受 部は端部が丸い。 底部は深く丸い。	底部外向回転ヘラ切 り。内面仕上ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 前庭部堆積土出土 外面全体に自然釉 (褐色)付着
蓋 身	蓋 坯 (身)	5-7 26-15	口径：9.9 受部径：12.2 器高：3.5	内傾するたちあがり は低く、端部は丸味 をもつ。 外上方にのびる受部 は端部を丸くおさめ る。 底部は深くやや丸い。	底部外向回転ヘラ切 り後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土 底部内面にベンガ ラが付着 底部外面にヘラ記 号「×」
	蓋 坯 (身)	5-8 26-8	口径：7.75 受部径：10.0 器高：3.1	小形、内傾するたち あがりは低く、端部 はやや丸い。 外上方にのびる受部 は端部が丸い。 底部は深く丸い。	底部外向回転ヘラ切 り後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 外面全体に自然釉 (白色)付着
	坏 身 (土師器)	5-9 26-16	口径：10.9 器高：3.8	厚手の坏身。端部を 鋭くおさめた口縁部 は、ゆるやかに内湾 しながら底部にいた る。 底部は平ら。	外向ハケ目調整。底 部はナデ。 内面はナデ調整。	胎土：密 焼成：良好 色調：赤褐色 玄室出土
	臺 (土師器)	5-10 —	口径：15.1 (推定)	口縁部は端部を丸く おさめ、頸部から肩 部にかけて「く」の 字状になる。 肩部はゆるやかに内 湾する。	肩部内面ヘラ削り。 頸部と肩部の境は指 頭によるナデ。	胎土：やや塑 焼成：普通 色調：淡赤褐色 前庭部堆積土出土 口縁部から肩部に かけて1/2残存

表11

器種 番号	直径 高さ cm	法 量 cm	形 態	技 法	備 考
五 号 横 穴 墓	長頸瓶 5-11 26-7	口径：6.54 休部最大径： 13.4 器高：16.25	外反する頸部は、約 1/2の位置でやや内彌 し、口縁部にいたる。 端部は丸い。最大径 を、肩部と休部の境 にもつ。 底部は平ら。	肩部にカキ目（1段 9~10条で3段）。 底部から休部1/2にかけ て回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 燒成：良好 色調：淡灰色 前庭部堆積土出土 肩の一部に自然釉 (緑色)付着
八	蓋 壺 (蓋) 5-12 27-1	口径：10.2 器高：3.8	内彌する口縁部は端 部が丸い。 天井部は丸味をもつ。	天井部外面回転ヘラ 切り後ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：密 燒成：良好 色調：青灰色 玄室出土
	蓋 壺 (身) 5-13 27-7	口径：9.2 受部径：11.4 器高：3.8	内傾するたちあがり は低く、受部より低い。 内面に一条の沈線を 有する。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切 り後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：粗 燒成：良好 色調：青灰色 玄室出土 外面1/2に自然釉(白 色)付着 底部内面にヘラ記 号「/」
横 穴 墓	蓋 壺 (身) 5-14 27-6	口径：10.0 受部径：12.6 器高：3.7	内傾するたちあがり は端部を丸くおさめ 内面に一条の沈線を 有する。 受部は外上方にのび 端部は丸い。口縁部 から天井部にかけて 浅い回線3条をもつ。 底部はやや平ら。	底部外面回転ヘラ切 り後、粗いナデ。内 面不定方向ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：緻密 燒成：普通 色調：暗灰色 玄室出土
	蓋 壺 (身) 5-15 27-4	口径：9.0 受部径：11.3 器高：3.5	内傾するたちあがり は低く、端部はやや 丸い。内面に一条の 沈線をもつ。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 口縁部と底部との境 に一条の回線をもつ。 底部はやや平ら。	底部外面回転ヘラ切 り。 他は回転ナデ。 ロクロ左回転。	胎土：密 燒成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土
穴 集	蓋 壺 (身) 5-16 27-8	口径：10.1 受部径：12.6 器高：3.9	内傾するたちあがり は端部が丸く、厚み をもつ。 受部は外上方にのび 端部が丸い。 底部は深く丸い。	底部外面回転ヘラ切 り。 内面不定方向ナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗 燒成：普通 色調：暗青灰色 玄室出土 底部外面にヘラ記号 「/」
	蓋 壺 (身) 5-17 27-2	口径：9.0 受部径：11.5 器高：3.6	内傾するたちあがり は、端部がやや丸い。 受部は外上方にのび 端部は丸い。 底部は丸い。	底部外面回転ヘラ切 り。 内面ナデ仕上。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土：やや粗 燒成：普通 色調：暗青灰色 前庭部堆積土出土 外面8割に自然釉 及び須彌器片付着

表12

器種	回数番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考	
八 号 横 穴 茶 蓋 (身)	5-18 27-3	口径：9.0 受部径：11.3 器高：3.1	内傾するたちあがりは低く、端部は丸味をもち内面に一条の沈線を有する。受部は斜め上方にのび、端部は丸い。口縁部から底部外面にかけて2条の凹線を有する。底部はほぼ平ら。	底部外周回転ヘラ切り後削りナデ。内面不定方向ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：やや粗 焼成：良好 色調：淡青灰色 玄室出土	
九 号 横 穴 茶 蓋 (身)	5-19 27-5	口径：9.0 受部径：11.3 器高：3.4	内傾するたちあがりは端部が丸い。斜め上方にのびる受部は端部が丸い。底部はやや深く、丸味をもつ。	底部外周自然釉付着のため不明。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：普通 色調：灰色 玄室出土 底部外面に自然釉(銀色)付着	
九 号	蓋 (蓋)	6-1 -	口径：12.4 (推定) 器高：3.8 (推定)	大形。口縁端部は丸味をもち、内湾しながら天井部にいたる。天井部は口縁部との境よりやや上方に傾き、その後平らになる。	天井部外周回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 少残存
横 穴	蓋 (蓋)	6-2 27-10	口径：11.2 器高：4.25	内湾する口縁部は端部が丸い。 口縁部から天井部にかけて3条の浅い凹線をもつ。 天井部は丸味をもつ。	天井部外周回転ヘラ切り後ナデ仕上。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：黄灰色 玄室出土
横 穴	蓋 (蓋)	6-3 27-9	口径：11.4 器高：4.1	内湾する口縁部は端部が丸い。 天井部は丸味をもつ。	天井部外周回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄門部出土 少残存
蓋 (身)	6-4 27-11	口径：10.6 器高：4.2	やや厚手。内湾する口縁部は端部が丸い。 天井部は丸い。	天井部外周回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 前底部堆積土出土 少残存	
蓋 (身)	6-5 27-12	口径：9.4 受部径：12.0 器高：3.7	内傾するたちあがりは低く、端部は丸味をもつ。内面に一条の沈線をもつ。 受部は外方にのび、端部は丸い。 底部は深く丸い。	底部外周回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土：緻密 焼成：良好 色調：灰色 玄室出土 外面方に自然釉(乳白色)付着	
蓋 (身)	6-6 27-13	口径：9.9 受部径：12.3 器高：3.7	内傾するたちあがりは端部がやや続い。 外方にのびる受部は端部が丸い。 底部は深く丸い。	底部外周回転ヘラ切り。 他は回転ナデ。ロクロ左回転。	胎土：密 焼成：良好 色調：青灰色 玄室出土 外面方に自然釉付着、底部外面ヘラ記号「X」	

表13

標識番号	器種	図版番号 写真番号	法量 cm	形態	技法	備考
九 号 横 穴 墓	蓋 坏 (身)	6-7 -	口径: 10.6 (推定) 受部径: 13.0 (推定) 器高: 3.5 (推定)	内傾するたちあがりは、端部がやや丸い。外上方にのびる受部は端部が丸い。	底部外面回転ヘラ切り。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	胎土: 細密 焼成: 普通 色調: 灰色 玄室出土 %残存
	蓋 坏 (身)	6-8 -	口径: 10.7 (推定) 受部径: 13.0 (推定) 器高: 3.3 (推定)	内傾するたちあがりは、端部が丸い。内面に一束の沈線をもつ。ほぼ水平にのびる受部は端部が丸い。	回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 暗青灰色 玄室出土 %残存
十 号 横 穴 墓	蓋 坏 (蓋)	6-9 27-14	口径: 9.5 器高: 3.45	端部を丸くおさめた 口縁部は約位まで直立 気味にたちあがり その後内側しながら 天井部にいたる。 天井部は平ら。	天井部回転ヘラ切り 後粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 灰色 玄室出土
	蓋 坏 (身)	6-10 27-16	口径: 9.5 受部径: 12.0 器高: 3.8	内傾するたちあがりは端部がやや鋸く、 内面に一束の沈線をもつ。 外上方にのびる受部は端部が丸い。 底部はやや平ら。	底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転	胎土: 細密 焼成: 良好 色調: 淡青灰色 玄室出土
	蓋 坏 (身)	6-11 27-15	口径: 9.1 受部径: 11.6 器高: 3.6	内傾するたちあがりは端部が丸い。 ほぼ水平にのびる受部は端部が丸く、厚みをもつ。 底部は深く平ら。	天井部回転ヘラ切り 後、粗いナデ。 他は回転ナデ。 ロクロ右回転。	胎土: 密 焼成: 良好 色調: 青灰色 玄門部出土

III まとめ

(1) 東支群の性格

東支群の横穴墓は12穴で構成されている。立地は小規模な谷が西向きに開いたやや急な斜面で、地山（真砂土）に掘り込まれている。標高は12~16mを測り、7号横穴墓の位置が最も高く、両側に山形状に次第に低くなり、最も低い位置にあるのが1号横穴墓である。

本横穴墓群周辺は、地質的に地山が脆い上に崖崩れ、防空壕などにより玄室及び羨道の一部あるいは半分以上が崩壊したり、破壊されたりしている。比較的残存状態の良好なものには2号~5号横穴墓、8号~10号横穴墓があるが、これとて完全なものではない。

形態的特徴を記すと、玄室の平面プランの多くは台形状を呈するが3号・4号・8号・9号横穴墓は縦長の長方形、10号横穴墓は正方形に近い形を呈するものである。床面は、4号横穴墓では奥に向けて3段に高くしたり、10号横穴墓では左右に屍体がみられるなどの設備がある。周溝は5号・7号~9号横穴墓にあるが、しっかりと巡らされたものではない。天井の形態は、横断面がアーチ形を呈し、いわゆるカマボコ形といわれるものには、2号・5号・7号・11号横穴墓がある。また、横断面が三角形を呈し、いわゆる妻入りのテント形といわれるものには、3号・4号・8号~10号横穴墓が認められる。羨道は、非常に長いのが2号~4号横穴墓で、やや長いのが5号・8号・10号~12号横穴墓、短いのが7号・9号横穴墓である。羨門は、二重構造を有する10号横穴墓以外はすべて単純構造を呈し、そのうち横溝を穿つものには、2号・8号・10号横穴墓がある。前庭の形態については、八の字状に広がり、やや短いものが多い。なお、7号・11号横穴墓の前庭は單に崖崩れによるものか、地形的に前庭を造る余地がなかったのか判然としなかった（註1）。

出土遺物についてみると、全体的には非常に貧弱な内容である。玉類は、3号横穴墓の前庭から勾玉が1個、鉄製品は刀子が5（2号横穴墓1、3号横穴墓1、4号横穴墓2、9号横穴墓1）出土している。土器については、須恵器の蓋・坏が圧倒的多数を占め、とくに3号~5号横穴墓に集中している。土師器は5号横穴墓で坏と壺が出土している。なお、4号横穴墓前庭出土の短頭壺および5号横穴墓出土の坏2個の内面にベンガラが認められる。

須恵器からみた本文群の築造時期は、山陰の須恵器編年のⅣ期にあたるものである（註2）。

以上、本支群の形態的特徴と出土遺物を概括してきたが、総合的に見て6号横穴墓と7号横穴墓とを境にして様相が異なるように思われる。すなわち、1号～6号横穴墓は規模が大きく遺物量も多いが、7号～11号横穴墓は小規模で遺物も極端に少ないことが指摘できる。しかしながら、形態的特徴や出土遺物の種類や質においてほとんど遜色がないことについては、横穴墓のもつ歴史的背景を如実に表わしているものと考えられる。

(註1) 池上信『横穴墓』(ニューサイエンス社 1980年)

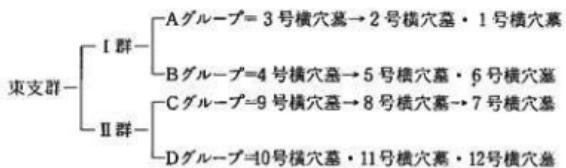
(註2) 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』 1971年)

(2) 平野横穴墓群の性格

平野横穴墓群は先述したとおり、東支群12穴、西支群7穴以上が存在し、それぞれが隣接してまとまりのある一群を構成している。ここでは東支群と西支群の比較検討を加え、さらに、周辺の横穴墓群との関連にも触れ、本横穴墓群の占める歴史的位置を考察することにする。

東支群は出土した須恵器から、ほぼ7世紀代に集中して營まれたと考えられる。その中で最初に築造されたのは、おそらく3号横穴墓と4号横穴墓だと思われる。この2穴は地形的な制約を受けない、南向き斜面の最も良い場所に占地している。形態的にも規模が大きく、妻入りテント形天井、長方形プランの玄室で、長い羨道を有するものである。出土遺物も豊富である。そして3号横穴墓には順次2号横穴墓と1号横穴墓が、4号横穴墓には5号横穴墓と6号横穴墓が続くものと思われる。これには、形態上の変化・出土遺物の減少が目立つのである。なお、5号横穴墓は何らかの事情で玄室が斜めに掘り込まれているのだが、6号横穴墓に制約されたものか否かは、6号横穴墓に伴う遺物が皆無のため前後を決める術はない。以上6穴は、南向き斜面に築かれ、比較的規模が大きく、出土遺物も多いという共通性が認められる。それに対して、7号～12号横穴墓は、北向き斜面に位置し、小規模で、出土遺物も少ないといえる。その中でも地形的制約を受けず、妻入りテント形天井、長方形プランの玄室をもつ9号横穴墓が注目される。これは、玄室の平面プランがやや正方形化する8号横穴墓、台形化する7号横穴墓に先行するものと考えられる。また、10号横穴墓は規模が大きく、羨道が長く、羨門は二重構造を示すものである。前庭を省略し、便化の傾向を示す11号・12号横穴墓はそれに追隨するものと推定される。次に出土した土器から横穴墓の築造期をみると、最も古い時期(Ⅱ類)の土器を出すのは3号・4号・9号横穴墓であり、上記の推定と矛盾しない。しかし、Ⅲ類以降の時期になると、

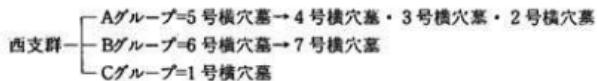
大半の横穴墓から出土しているので、それらの新旧関係は明確にすることは不可能である。なお、1号～5号横穴墓はⅡ類からⅦ類の土器を出すことから、追葬を含め長期間営まれていたことが判かる。このように見えてくると、本支群の構築順序から次のような模式図が浮び上がってくる。



以上、東支群は大きな流れとして、①規模の縮小化 ②構造上の便化、簡略化 ③妻入りテント形天井、長方形プランからカマボコ形天井、台形プランへの移行 ④副葬品の減少化などの傾向が指摘できるのである。

西支群は、出土した須恵器から、ほぼ7世紀代に築造されたものと考えられる（註1）。本支群で注意すべきことは、調査した7穴以外にもおそらく10穴前後の横穴墓の存在が見込まれるということである。このことを念頭において構築順序を検討することとする。出土土器の中で最も古い時期の須恵器を出すものに、5号・6号横穴墓がある。5号横穴墓は、玄室の平面プランが正方形を呈し、幅広の長い羨道をもつ。羨門は二重構造を呈し、長い前庭が取り付く。さらに出土遺物は数・質ともに豊富で、馬具・直刀・多数の須恵器を有する。また、6号横穴墓は、玄室の平面プランが正方形を呈し、羨道は短く、長い前庭が取り付く。出土遺物には金環・刀子・多数の須恵器を有するなどの点で、5号横穴墓とはほぼ同様の性格をもつものである。憶測を混えるならばこの2穴は互いに意識し、隣接した場所に築かれたものとして推察される。なぜならば2穴の比高差が2mもあるものの、隣接して築くことによって両者の墓地の境を限定しようとしており、次に築造される予定の横穴墓の余地を確保しようとしたためであろうと思われるからである。その規則に従って、5号横穴墓は南側の空間地へ4号横穴墓、3号横穴墓、2号横穴墓と規模を縮小しながら墓地を拡大していくものと考えられる。同様なことが6号横穴墓と7号横穴墓との間の未開口の横穴墓の関係においても窺われる。なお、1号横穴墓は小屋根を挟んで独立した位置に穿たれているが、何らかの事情により築造を途中で中止したのであろう。次に、出土した土器からみると、最も古い時期のⅠ類をもつものに5号・6号横穴墓がある。4号・3号横穴墓はⅡ類からⅢ類まで続くが、2号横穴墓はⅡ類の時期だけで終る。7号

横穴墓はⅢ類以降に出現しその頃1号横穴墓も築造されたと考えられる。本支群は次のような模式図を試みた。



以上、本支群の大きな流れとしては、①規模の縮小化 ②構造上の便化、簡略化 ③玄室の平面形が正方形プランから長方形プランへ移行 ④天井形態がアーチ形、カマボコ形からドーム形、カマボコ形へ移行 ⑤副葬品の減少などの特徴が指摘できる。

東支群と西支群の築造時期について、再度検討することとする。最も早い時期、おそらく7世紀初め（I類）と考えられる横穴墓は、西支群5号・6号横穴墓である。7世紀前葉（II類）になると、西支群ではその数が急増し最盛期を迎える。これと相い前後して、東支群では漸く3号・4号・9号横穴墓が姿を現す。7世紀中葉から後葉（III・V類）には東支群で最盛期を迎えるが、その後新しい横穴墓の築造はなくなり、追葬の繰り返しが7世紀後葉（IV・VI・VII類）まで続くものと考えられる。また、西支群でも7世紀中葉を最後に横穴墓の築造が完了し、追葬もあまり行われなくなったようである（註2）。

次に、東支群と西支群の関係について触れると、両支群は同じ馬蹄形の谷に對面する形で営まれ、個々の横穴墓の構造、出土遺物の内容からみて、それほど対立する関係のものではないと思われる。想像を逞しくすれば、むしろ、二つの集団が同じ谷を基盤とみなし、東側の斜面に一方の集団が、西側の斜面に他方の集団が自らの墓地を設けたと考え方が妥当であろう。

表14 平野横穴墓群一覧表

支群	番号	東			西			資料出處
		高さ	奥行き	正面幅	高さ	奥行き	正面幅	
西支群	1	2.28	1.60	1.54	—	1.40	0.90	0.80 (6.0)
	2	1.86	1.14	1.20	—	1.04	—	—
	3	—	—	—	—	—	—	山根(1980)
	4	2.24	1.68	1.26	1.20~1.24	1.28	0.98	0.80 (8.0)
	5	2.40	1.74	1.90	—	2.00	1.18	1.00
	6	2.38	2.08	1.63	—	1.22	1.72	0.80 (山根(1980))
	7	1.60	1.12	1.04	0.9~0.92	0.9	0.6	0.50 (山根(1980))
東支群	1	(2.34)	(1.78)	—	(1.50)	(1.30)	—	—
	2	1.80	1.82	1.52	—	2.65	1.02	1.12
	3	2.18	1.82	1.76	1.60~1.70	2.68	1.02	1.15
	4	2.20	1.88	1.70	—	3.40	1.00	1.50
	5	2.24	1.96	1.63	0.95	2.94	1.04	1.30
	6	—	—	—	—	—	—	—
	7	1.58	1.73	1.64	0.9~0.94	—	0.9	—
	8	1.92	1.78	1.60	1.08~1.12	2.22	1.20	0.9
	9	1.94	1.60	1.48	0.9~0.94	1.40	0.9	0.6 (山根(1980))
	10	1.74	1.68	1.80	—	2.80	0.95	0.78 (山根(1980))
	11	2.05	1.90	1.70	—	—	—	—
	12	1.20	1.08	1.18	—	0.8	0.8	0.2

※ () 内は復元値である。

平野横穴墓群の位置する平野丘陵には、他に劍山横穴墓群、コモゴ山横穴墓群、亀山横穴墓が知られている。こうした横穴墓・横穴墓群集中地区は、ほとんどが仏経山（神名火山・標高366m）の周囲に派生する低丘陵に存在している。本横穴墓群を中心とした仏経山北麓地域と、山の奥横穴墓群（13穴以上）を中心とした仏経山北西麓地域、さらに岩滝横穴墓群（4穴）などのある仏経山南麓地域に合計12の横穴墓群が集中している。穴数では50穴を越えるほどである。これらの横穴墓の玄室の天井形態をみると、仏経山北麓地域では家形・カマボコ形・テント形、北西麓地域では家形・カマボコ形・テント形・丸天井形、南麓地域では家形などと極めてバラエティーに富んでおり、この地域の特徴を示している。

斐川町には、出西丸子古墳、柄雲寺古墳、高野1～3号古墳など、いわゆる石棺式石室とよばれる内部構造をもつ古墳が知られている（註3）。出雲に多い整形家形構造をもたない平野横穴墓群が、これら「石棺式石室」墳の多い地域の中にあって、どのような係り合いで発生し、かつ消えていったのか、など今後に残された謎題は山積している。ともあれ、斐川町内において、これだけまとまった数の横穴墓を調査し、その概要を把握できたことは、この地域の古墳文化を解明すべき貴重な資料となるであろう。

（註2）『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集（島根県教育委員会 1977年）

（註3）池田満雄「第2編・近代以前の斐川」（『斐川町史』斐川町教育委員会 1972年）

表15 斐川町横穴墓一覧表

番	名	所 在	規 格	出 土 财 物
1	人穴横穴墓群	宇治大森	6穴・家形	須恵器
2	鷹山横穴墓群	舟前町鷹山	3穴・複雜形	劍刀、刀子、鉄鏃、須恵器
3	平野横穴墓史料	上佐在平野	12穴・複雜形、支入りテント形	勾玉、金珠、刀子、須恵器、土師器
4	平野横穴墓史料	〃	7穴以下・複雜形	金珠、馬具、劍刀、刀子、鉄鏃、須恵器、土師器
5	舟前横穴墓群	〃	2穴	劍刀、須恵器
6	コカガリ横穴墓群	〃 八畠	1穴・家形參入	
7	鷹山横穴墓	〃 平野	1穴	須恵器
8	武川横穴墓群	出西ト出西	1孔1穴	須恵器
9	八幡宮横穴墓	〃	1穴・丸天井形	須恵器
10	山の巣横穴墓群	〃	13穴以上・家形、複雜形、テント形	須恵器
11	笠木山跡宅西横穴墓群	中出西	2穴	
12	海の巣横穴墓群	伊保	3穴	
13	さゆ地横穴墓群	岩井	4穴・家形	
14	某川横穴墓群	阿賀原尾	4穴	

複雜形とは玄室底断面が台形、複雜形がアーチがあるいはドーム形を呈するものをいう。

テント形とは玄室の天井と壁面の区別がなく、断面が円形を呈するものをいう。

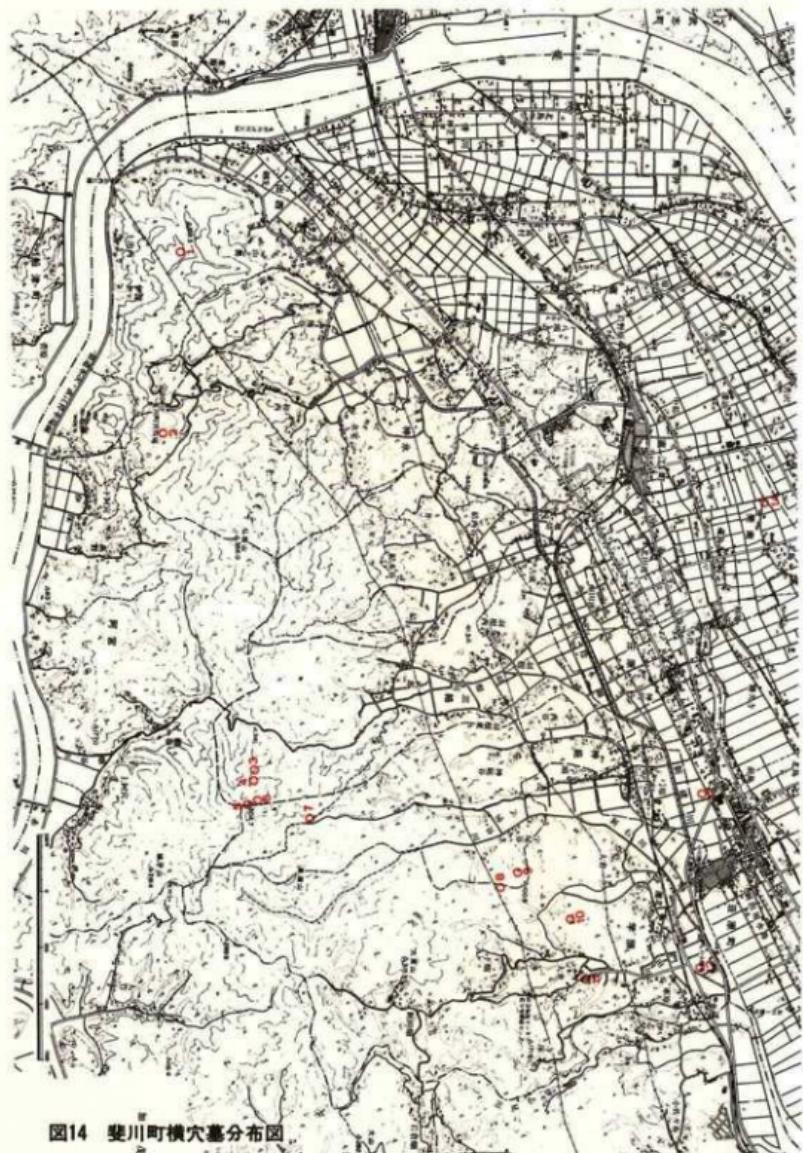


図14 斐川町横穴墓分布図

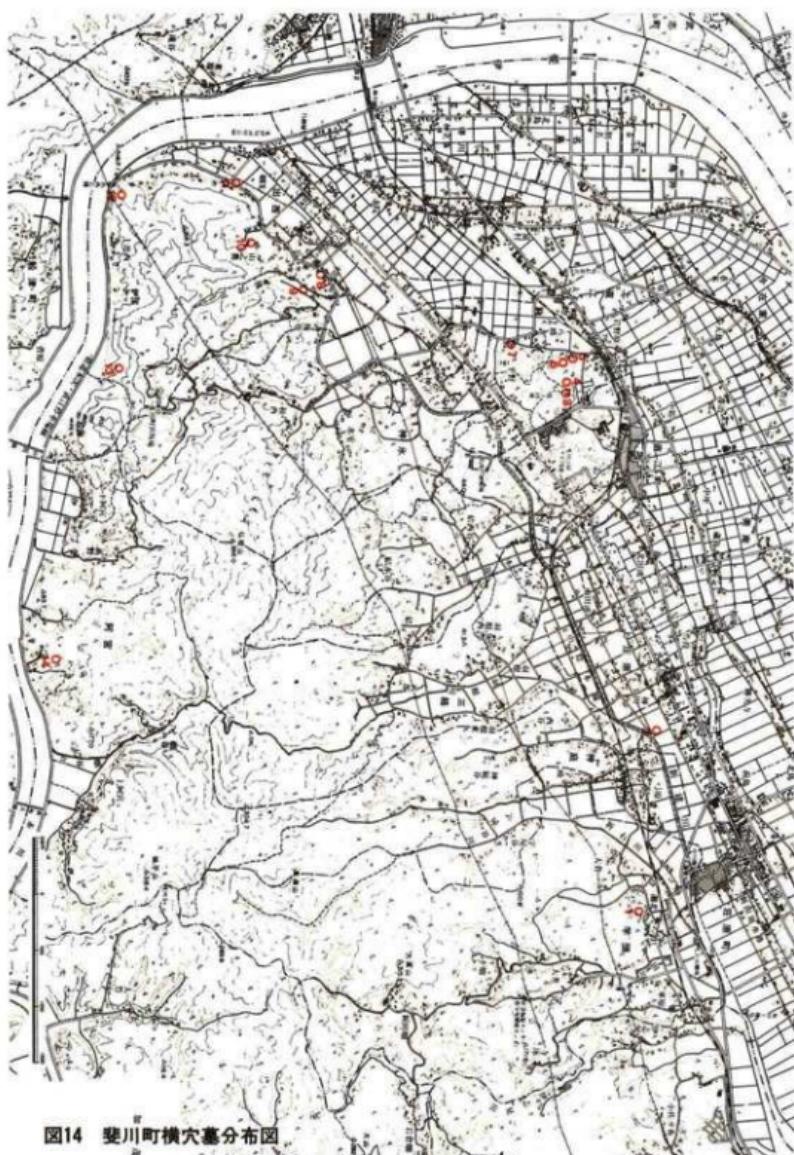


図14 斐川町横穴墓分布図

IV 出土人骨鑑定

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井上晃孝

(1) 4号横穴墓出土人骨

玄室は上・中・下段の三段(図15)に分かれており、各段に人骨が散在している。

上段は主に4肢骨、中段には頭骨、下段には頭骨、上頸と下頸が残存している。これらの人骨は、いずれも破損して完形のものではなく、骨質も脆く、骨の色調は汚黄白色～汚黄褐色調を呈していた。

1. 上段

骨は骨格順に配列しておらず、頭骨はなく、床中央部から右側に向けて大半の4肢骨と体幹骨の一部が残存する。上肢骨は左右の上腕骨の骨片1個と左右の脛骨を認めたが、腓骨は消失していた。体幹骨としては椎骨(腰椎骨)と骨盤の一部を認めた。その他骨名不明の小骨片小数残存。床砂からは歯牙は全く検出されない。年令は骨の大きさから一応或人が推定され、性別、身長とも不明である。

2. 中段

羨道からみて、右側端に須恵器4個があり、その周囲に頭骨片が散在しており、頭頂骨の一部(冠状と矢状縫合とも接着なし)、前頭骨の一部(内板の前頭稜部)左頸骨片、その他頭骨片少數認める。中央部には骨片5個を認める。本尾骨の性別は不明年令は頭蓋冠の結合状態から若年者が推定され、4肢骨もないので、身長も不明である。中段の左側には頭骨(左側頭骨から後頭部と右側頭骨)、下頸骨は正中部から大きく2つに折損、破損しているが、一部歯牙が付着している。歯牙は左下頸では第2小臼歯(「5」)は歯根部のみ、第1、2、3の大臼歯(「6、7、8」)が残存する(写真1)。右下頸では、第1、2大臼歯(「7、6」)が残存する(写真2)。これらの歯牙の咬耗度は軽度でMartinの分類では1～2^oに相当し、年令は壮年(30才前後)が推定される。性別は頭骨が完形でないので特定しがたいが、左右の下頸骨の諸形態学的特徴から男性らしいと推定される。身長は不明である。この頭骨と下頸骨は上段の人骨由来のものと考えられ、上段から中段にころがり落ちたものと推定される。

3. 下段

頭骨の一部として、左右の側頭骨部（耳孔、乳様突起ら）は小さく、一見して小児骨である（写真3）。四肢骨片1個、下顎骨と上顎骨（歯牙付着）とその他床砂から少數の歯牙が検出された。右上顎骨には歯槽内に、中切歯、側切歯、第1小臼歯と第2大臼歯（歯冠部のみ）が残存していた。下顎の切歯（歯名不明）の歯根が2個残存。右下顎では第1小臼歯の歯根部と第1大臼歯が残存していた。これら残存歯牙はすべて永久歯である。右下顎の第1大臼歯（6才臼歯）が磨耗しており、第2大臼歯が歯冠のみで、未だ萌出していない（萌出は13～14才位）ところから、年令は10～12才位が推定される。性別・身長とともに不明である。

4. 埋葬者数

本横穴墓は、上・中・下段の三段ベッドになっており、上段には左頭位の1体が埋葬されていたものと推定され、床中央部～右側に四肢骨と体幹骨の一部が残存し、頭骨は中段にころがり落ちたものと推定される。中段は右頭位で一体が埋葬されたものと推定され、土器の周囲に頭骨片が散在するが、中央部には四肢骨、体幹骨の一部が残存する。下段には右頭位の小児1体が埋葬されたと推定され、頭骨片・上・下顎と四肢骨の一部が残存する。

5. まとめ

本横穴墓は、上・中・下段の三段ベッドになっており、各段に1体ずつ計3体が埋葬されたものである。

上段：壮年の男性らしいと推定

中段：若年者で性別不明

下段：10～12才位の小児で性別、不明

(2) 5号横穴墓出土人骨

5号横穴墓内には人骨が大きく2箇所に散在しており、玄室入口より向って右奥（A地点）には残存骨が少なく、採取番号①～②の骨のみで、頭骨（後頭部、左右の側頭部の一部）と椎骨の一部のみである。玄室より向って左側ほぼ中央（B地点）部に大半の骨があり、採取番号③～⑩までの頭骨、下顎骨、四肢骨片、その他の骨が一定の方向性もなく、成人骨と小児骨が集中的に混在している（図16）。これらの残存骨は、いずれも風化が著しく、完全な形の骨が皆無で骨片化している。

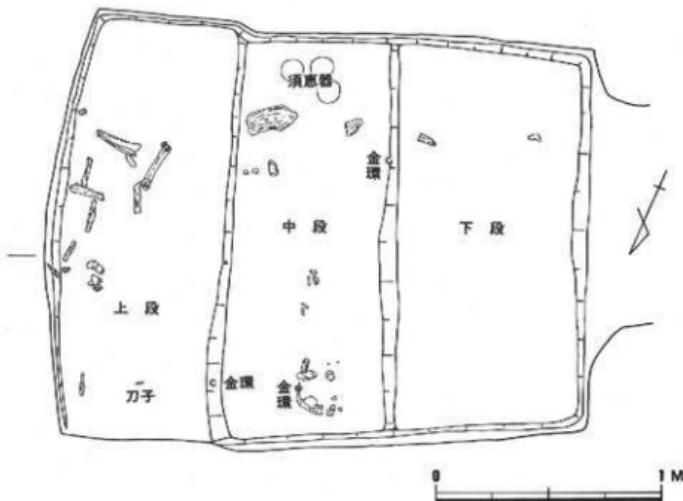


図15 東支群4号横穴墓人骨・遺物出土状況

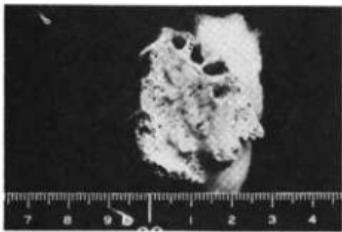


写真1 上段の壮年男性(?)
左下顎(第1・2・3・大臼歯付着)

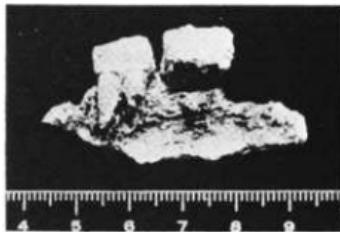


写真2 上段の壮年男性(?)
右下顎(第1・2・大臼歯付着)

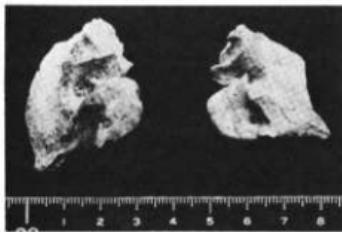


写真3 下段の小児頭骨片
(左右側頭骨部)

1. 埋葬者数

A地点

頭骨（後頭部、左右の側頭部の一部）と椎骨の一部が残存しているが、成人骨で消失骨はあるが重複骨がないので、1名が埋葬されたものと推定する。

B地点

散在した骨を整理すると成人2名と小児2名の骨が混在しており、骨片化している骨も多いので、個別に識別することは不可能である。

そこで、埋葬者数は、主に上・下顎とその付着歯牙または遊離歯牙を中心に検討した。小児の上顎の左第1大臼歯と右第2小臼歯が重複して存在することは2名が埋葬されたことになる。成人の下顎骨は2個残存することから2名が埋葬されたことを推定される。以上から本5号横穴墓にはA地点に成人1名、B地点には成人2名、小児2名の計5名が埋葬されたことになる。しかし、その他同定不明の骨片もあることから、それ以上の埋葬者も否定できない。

2. 埋葬者の性別と年令

A地点

残存頭骨片は後頭部の人字縫合部を中心とした部位、左右の側頭部の一部（乳様突起ら）で、完形の頭骨でないので、性的特徴をつかみ難いが、外後頭隆起の発達が弱いこと、上、下顎線の発達が弱いこと、左右の乳様突起の発達が弱いことから女性と推定される。残存頭骨の矢状縫合と人字縫合は癒着が全く認められず、縫合面のきれこみが鋭いことから一応若年者が推定される。

B地点

採取番号③の頭蓋骨の下から採取された遊離歯牙は左上顎の第1大臼歯（L6）、第2大臼歯（L7）と右上顎の第2小臼歯（51）、第1乳臼歯（D1）である。
永久歯の萌出をみると、

第1大臼歯は6～7才（6～8才）

第2小臼歯は11才（10～14才）

第2大臼歯は13～14才（10～14才）であり、第1大臼歯は萌出しているが、第2小臼歯と第2大臼歯はまだ萌出していないので、年令は10～12才位が推定される。採取番号⑥は小児の左上顎骨で歯槽部の1～5まで、歯牙ではなく、歯槽が深いので、死後欠落したものである（写真1）。

採取番号⑧は左下顎体があり、第1大臼歯（6）は死後欠で、第1乳臼歯（D）、

第2乳臼歯（「E」）が残存し、第1乳臼歯の下に第2大臼歯（「7」）が埋没している。右下顎には、第2乳臼歯（「E」）があり、その下に第2小臼歯（「5」）が埋没し、第1大臼歯（「6」）は萌出している（写真2）。その他遊離歯牙として、左上顎第1大臼歯（「6」）、右上顎では中切歯（「1」）、側切歯（「2」）、第2小臼歯（「5」）左下顎の犬歯（「3」）が萌出して、右下顎の第2大臼歯（「7」）が埋没しているところから年令は10～12才位が推定される。これらの残存歯牙から小児の性別を判定することはかなり困難であるので、現時点では性別不明としたい。

採取番号⑩は下顎があり、右3（「3」）～左6（「6」）までの歯槽部があり、左5（「5」）は歯根が埋没しているが、その他の歯牙はなく、すべて歯槽が深く、死後欠落したものである（写真3）。遊離歯牙として左下8（「8」）、右下6（「6」）が残存し、その咬耗度は、Martinの分類では1～2°で30才前後が推定される。

下顎骨の諸形態学的特徴から男性らしいと推定される。

採取番号⑪は下顎骨で左右の下顎枝を欠くが、7個の歯牙が付着している（写真4、5）。付着歯牙は左下顎の「2」、「3」、「4」、「5」、「6」、と右下顎の「3」、「6」、遊離歯牙として「7」、「2」、「4」、「5」、が残存し、その咬耗度をみると、極めて軽度であり、Martinの分類では1°で、年令は20才前後が推定される。下顎骨は形態学的に強固でかなり大きく、男性的特徴をよく具備しているので、男性と推定する。

3. 疾病らの異常

残存骨は風化が著しく骨片化しているので、疾病らの異常については不明である。

残存歯牙は、すべて健常歯であり、齶歯（虫歯）は全く認められない。

4. その他

小児は2名とも年令が10～12才位と推定されるが、両者の関係は不明である。

5. まとめ

東支群5号横穴墓の埋葬者数は5名が確認されたが、埋葬者の人骨配置は極めて不自然で、後日人為的に動かされた形跡がある。

埋葬者の内訳は次の通りである。

A地点 女性で若年者（成人1名）

B地点 小児2名で年令は10～12才位であるが、性別は不明である。

成人2名で、うち1名は30才前後の男性、他の1名は20才前後の男性と推定される。なお、B地点には、同定不明の骨片もあるので、それ以上の埋葬者も否定できない。

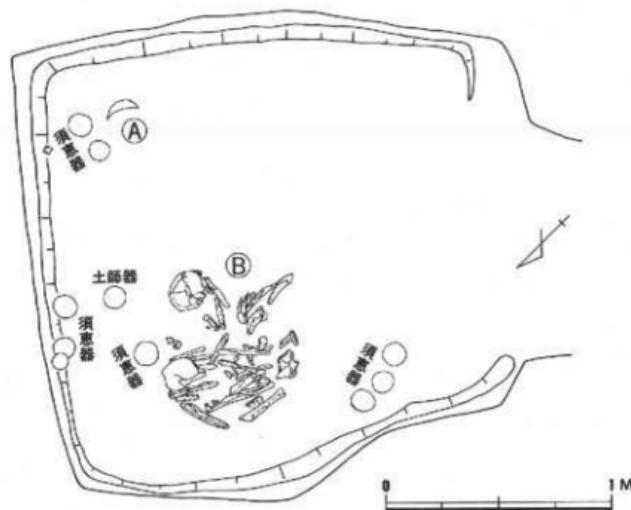


図16 東支群5号横穴墓人骨・遺物出土状況



写真1 小兒左上顎骨

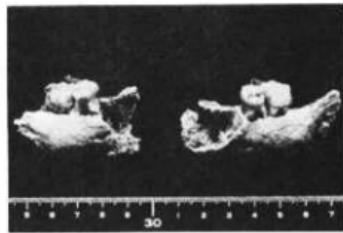


写真2 小兒左右下顎骨

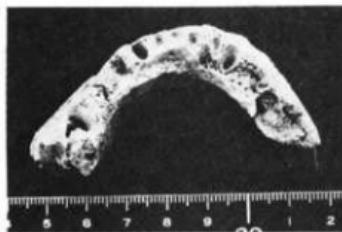


写真3 成人(男)下顎骨

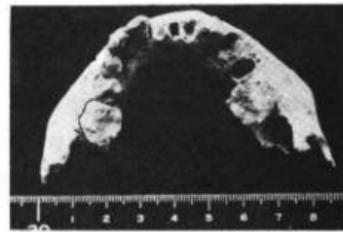


写真4 成人(男)下顎骨



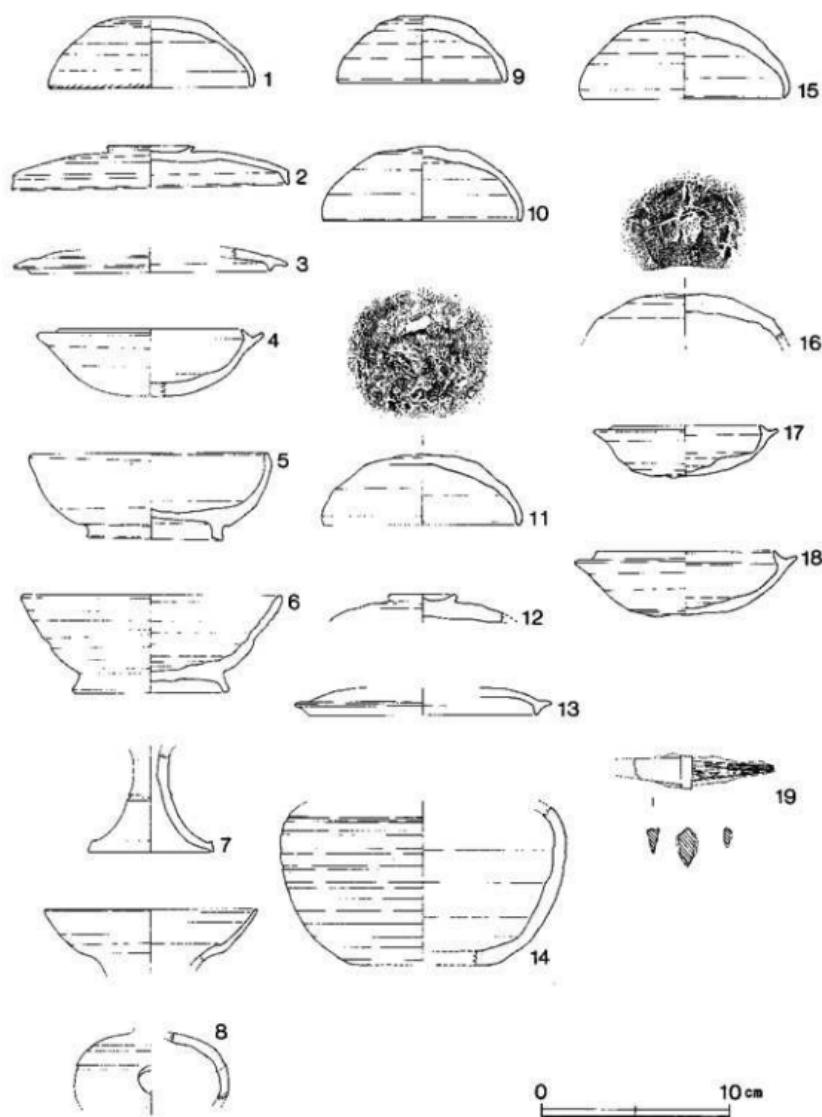
写真5 成人(男)下顎骨

(3) その他の人骨

横穴墓番号	残存骨	残存歯牙	性別	年令	備考
7号 横穴墓	2個の4肢骨片 (形態学的特徴不明) しいて言えば上腕骨と 脛骨(?)	なし	不明	不明	
8号 横穴墓	頭骨片(主に側顎骨片 10個)、頭骨の厚さ2.5 ~8.5mm(成人域)	大臼歯 5個 小臼歯 2個 咬耗度 1~2°	不明	壮年	
9号 横穴墓	2個の4肢骨 (左右の脛骨体の一部)	なし	不明	不明	
10号 横穴墓	左下顎骨の一部 左右の大脛骨の骨体部 右の脛骨体の一部	大臼歯 2個 咬耗度 3°	女と推定 下顎の頸結節 の発達弱い。 歯牙が小さい。	熟年	

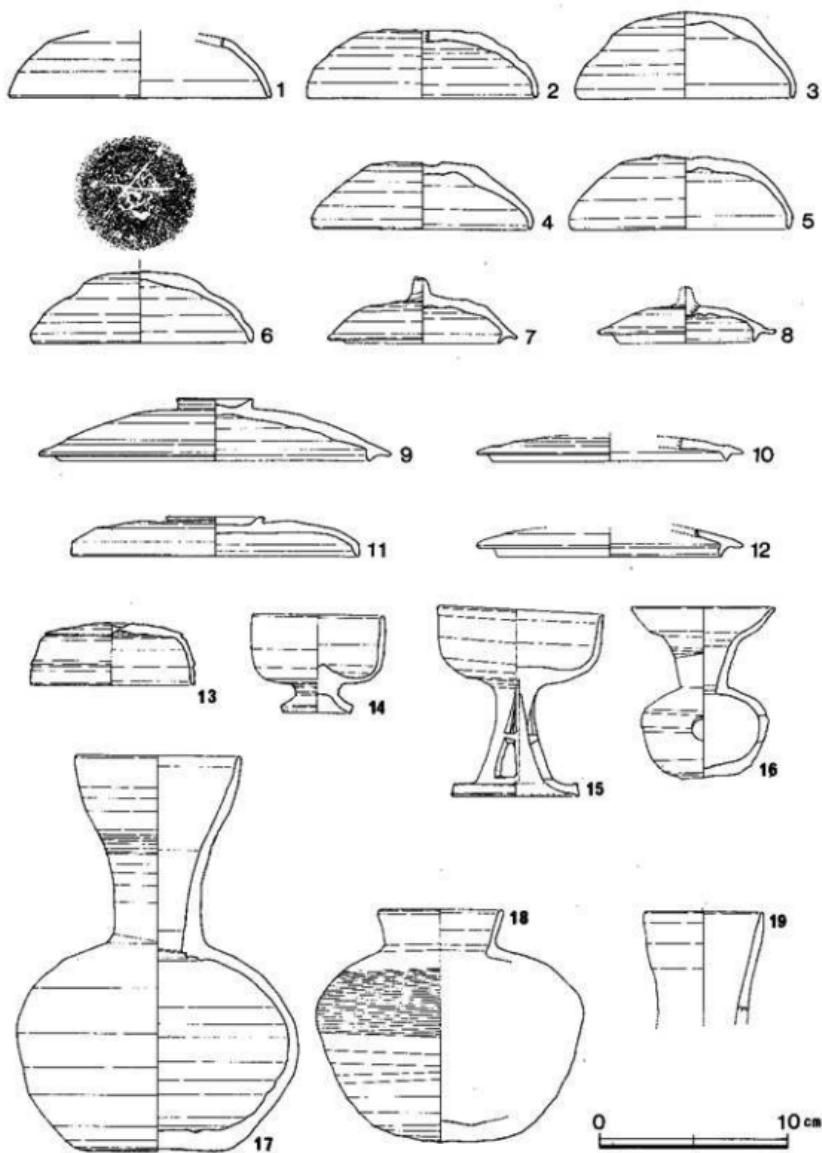
図 版

図版 1



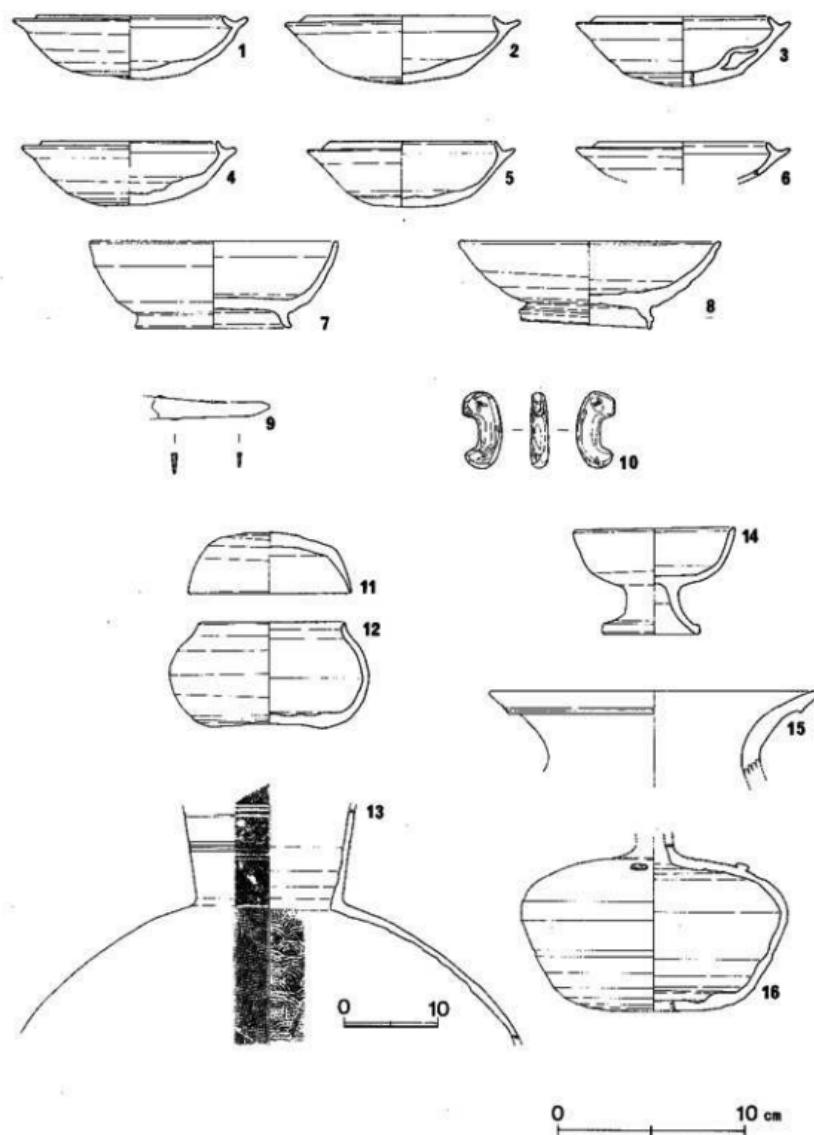
東支群1号(1~8)、2号(9~19)横穴墓出土遺物実測図(%)

図版2



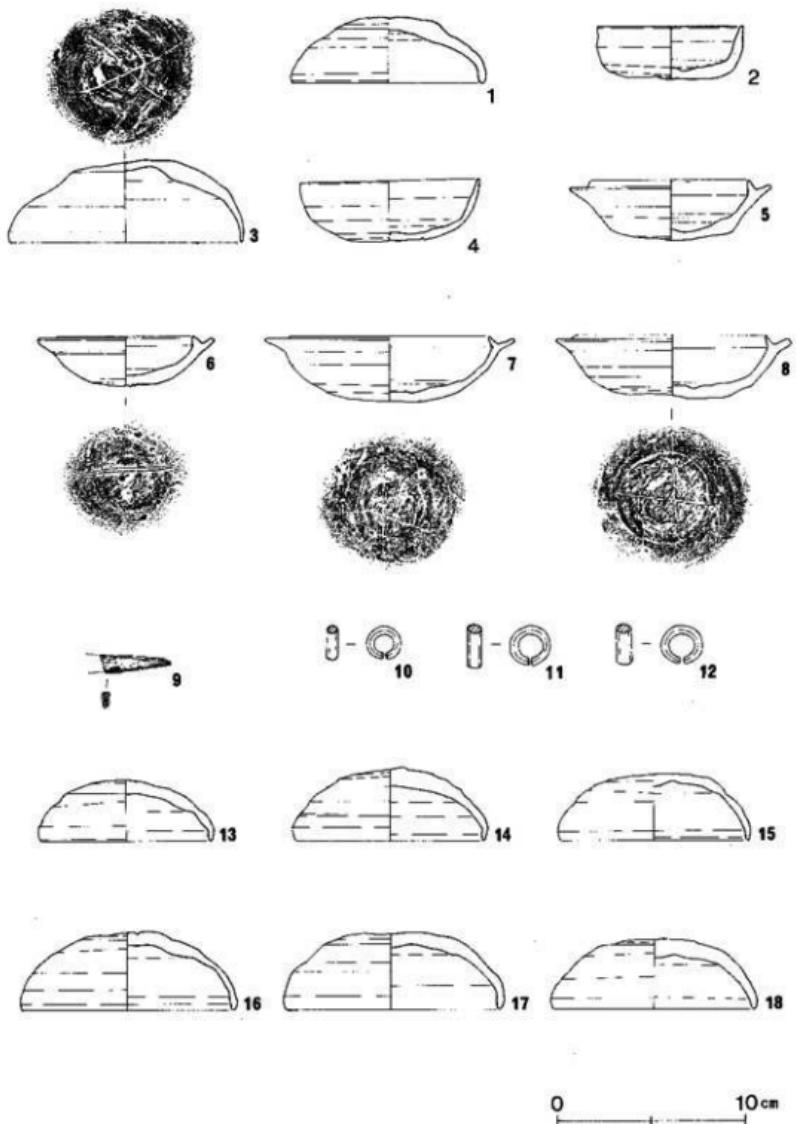
東支群3号横穴墓出土遺物実測図(1/6)

図版3



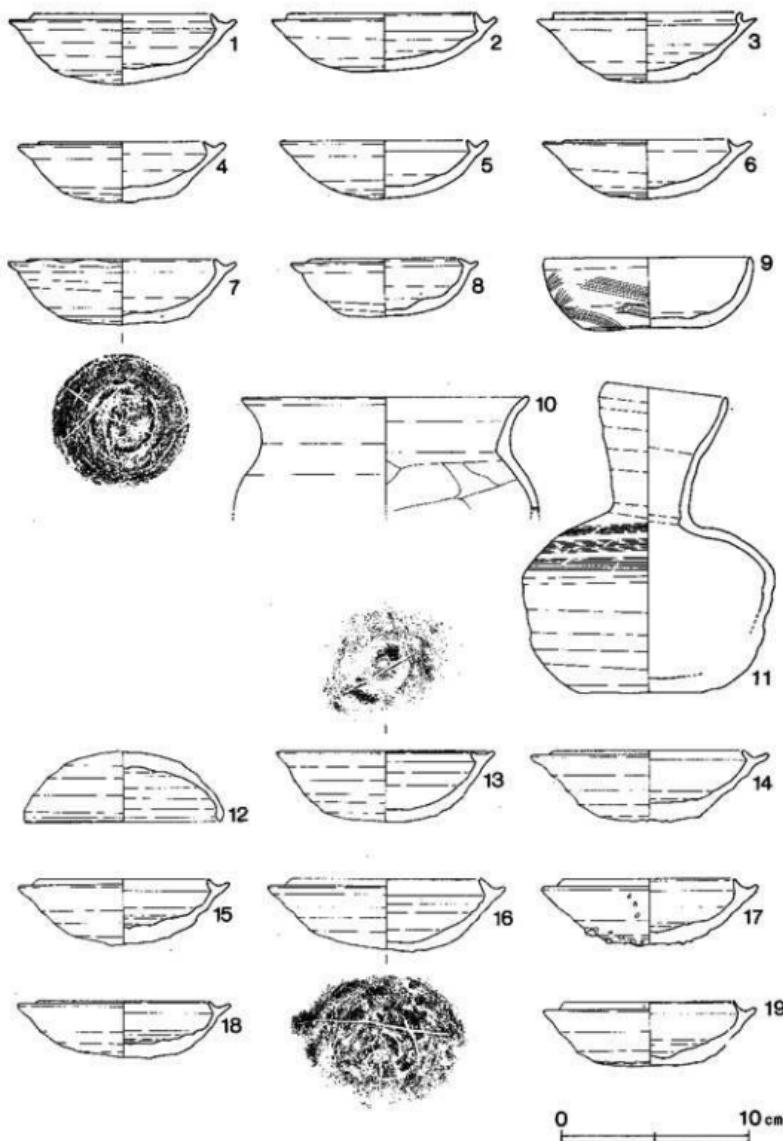
東支群3号(1~10)、4号(11~16)横穴墓出土遺物実測図(13は%、他は%)

図版 4



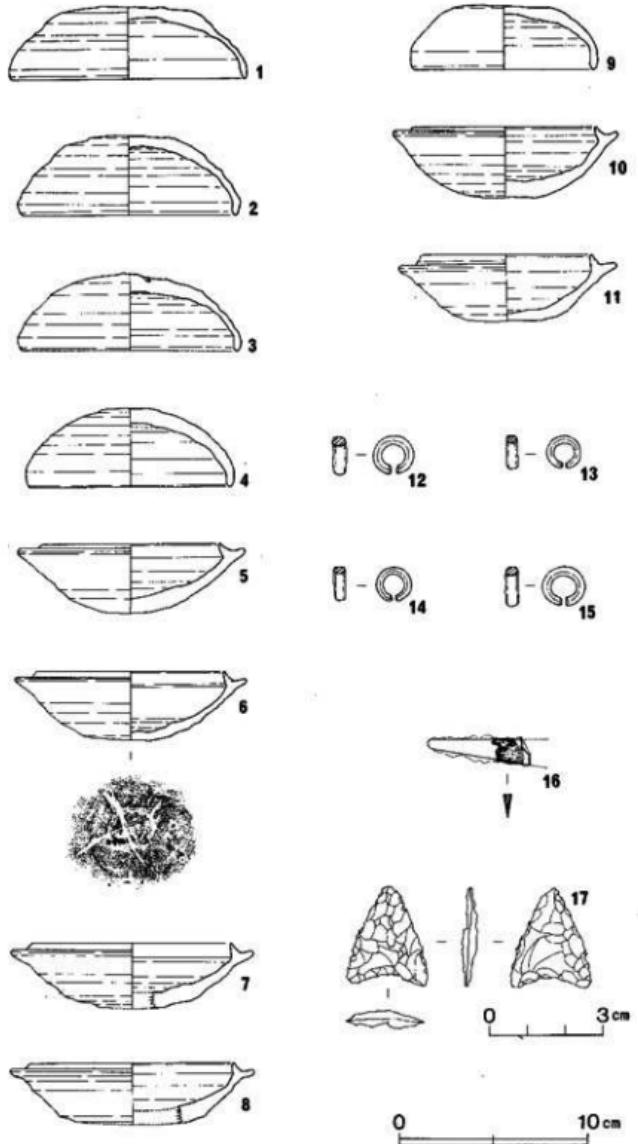
東支群4号(1~12)、5号(13~18)横穴墓出土遺物実測図(3)

図版5



東支群5号(1~11)、8号(12~19)横穴墓出土遺物実測図(%)

図版6



東支群9号(1~8、12~16)、10号(9~11)横穴墓出土遺物実測図

(17は3%、他は3%)

(17)は6号横穴墓下方

図版7

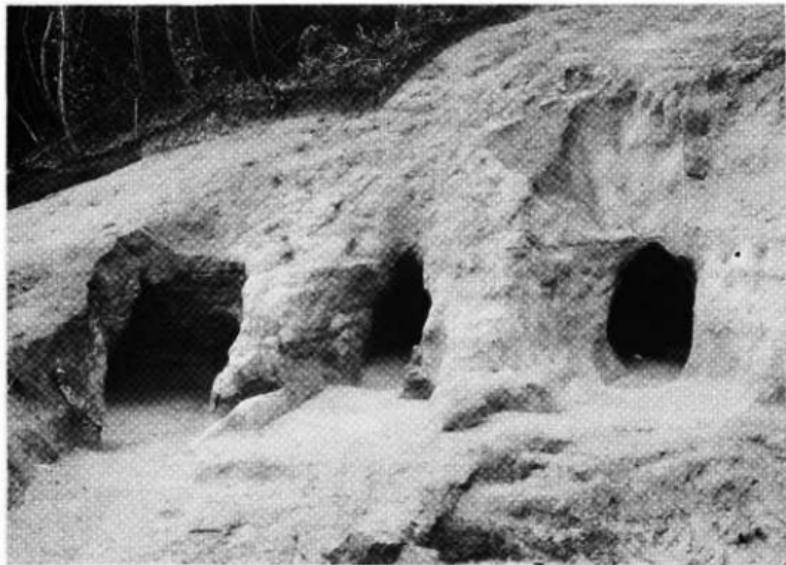


平野遺跡群周辺の航空写真 (1平野横穴墓群、2平野東横穴墓群)
(3~5高村跡地、6・7平野跡地) 南より



平野横穴墓東支群近景(北西から)

図版8



左から東支群1号・2号・3号横穴墓近景(西から)



左から東支群4号・5号・6号横穴墓近景(西から)



左から東支群7号・8号・9号横穴墓近景(西から)



左から東支群10号・11号・12号横穴墓近景(北から)

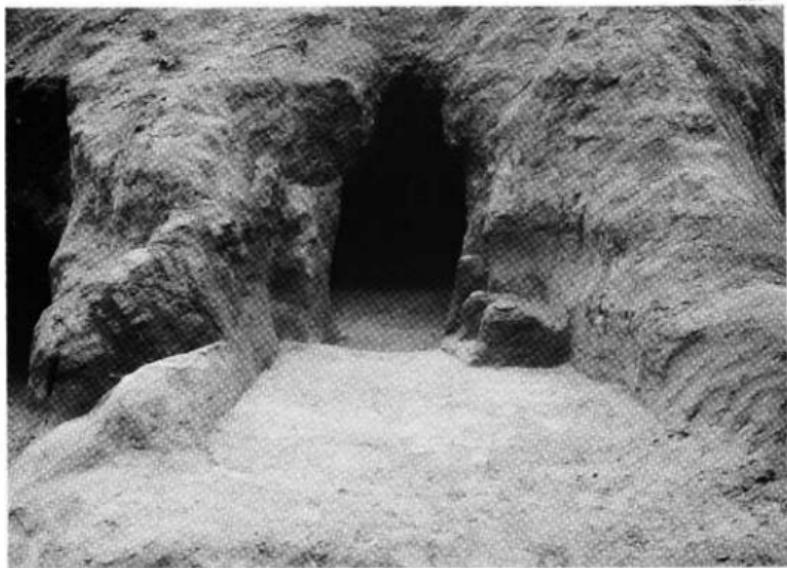
図版10



東支群1号横穴墓前景(西から)



東支群1号横穴墓玄門土層堆積状況(西から)



東支群2号横穴墓前景(西から)



東支群2号横穴墓玄室内土層堆積状況

図版12



東支群3号横穴墓蓑門閉塞状況(西から)



東支群3号横穴墓玄室内遺物出土状況(西から)

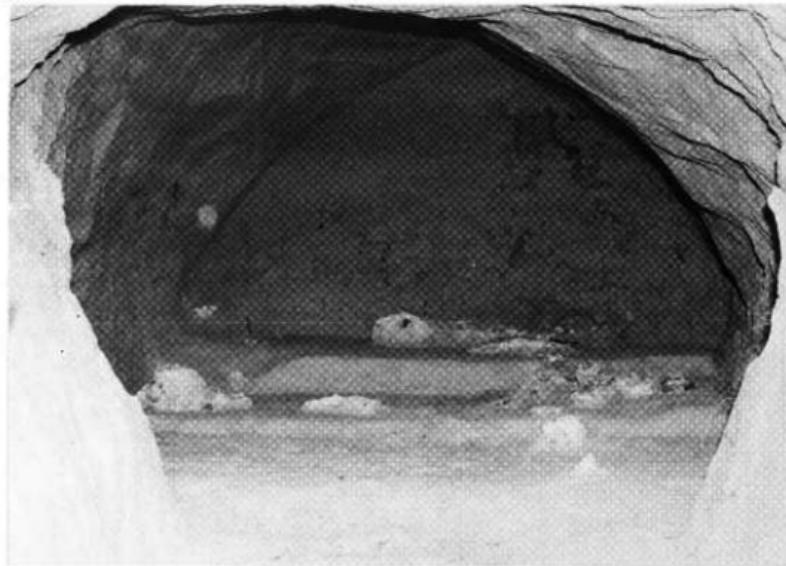


東支群4号横穴墓前景(西から)



東支群4号横穴墓堵門閉塞状況(西から)

図版14



東支群横穴墓玄室内正面(三段床)



東支群4号墓玄室内人骨及び遺物出土状況(左侧壁ぎわ中段)



東支群5号横穴墓前景(西から)



東支群5号横穴墓羨門閉塞状況(西から)

図版16



東支群5号横穴墓玄室内正面



東支群5号横穴墓玄室内人骨及び遺物出土状況(奥壁ぎわ)



東支群7号横穴墓玄室内土層堆積状況(西から)

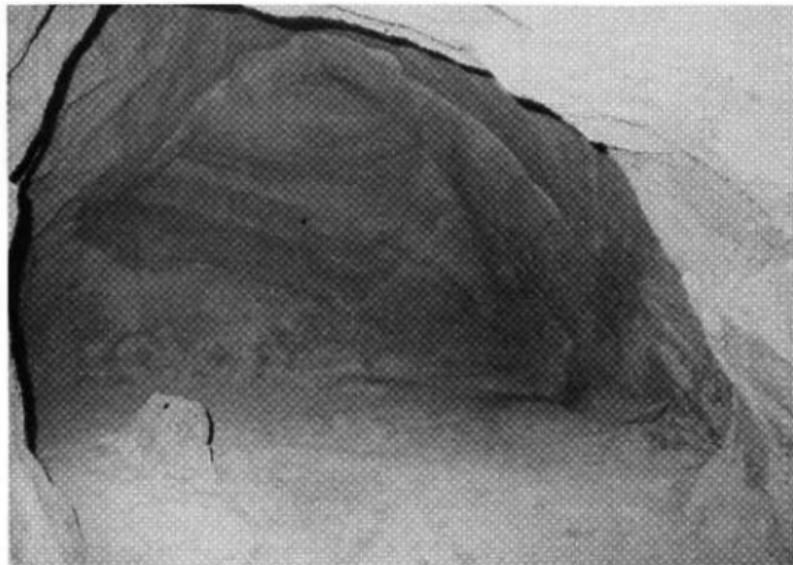


東支群7号横穴墓玄室内正面(西から)

図版18



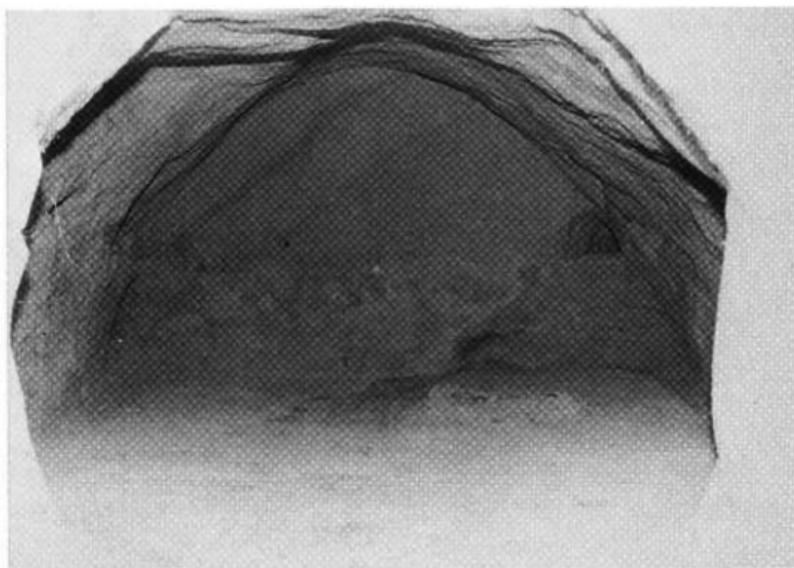
東支群8号横穴墓羨門閉塞状況(北西から)



東支群8号横穴墓玄室内遺物出土状況



東支群9号横穴墓羨門閉塞状況(西から)



東支群9号横穴墓玄室内正面

図版20



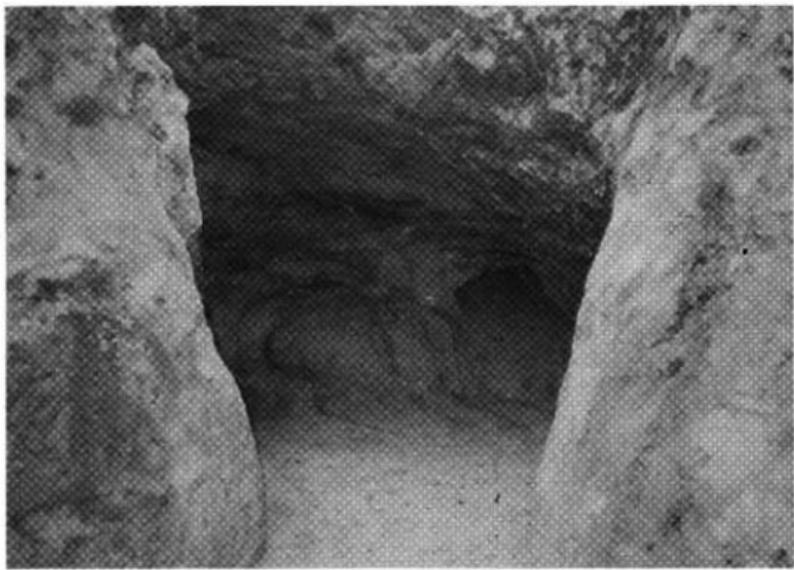
東支群10号横穴墓羨門閉塞状況(北西から)



東支群10号横穴墓玄室内正面



東支群11号横穴墓玄室内土層堆積状況(北から)

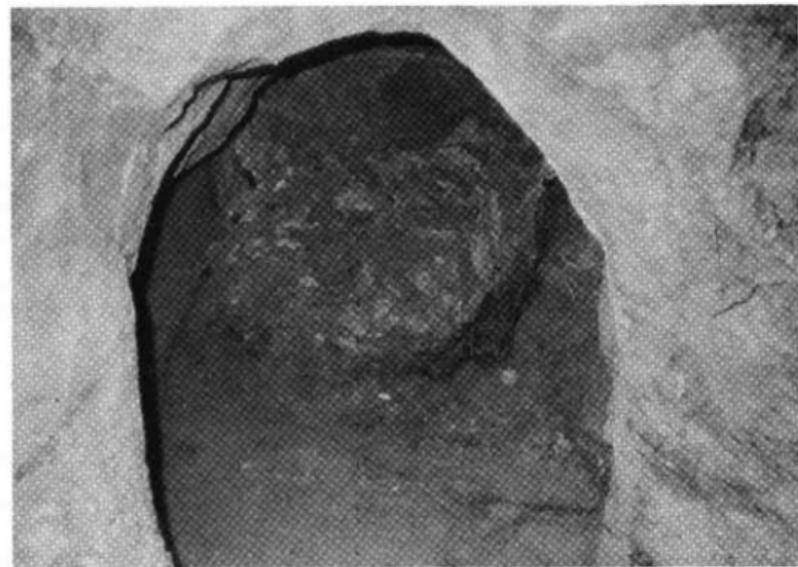


東支群11号横穴墓玄室内正面

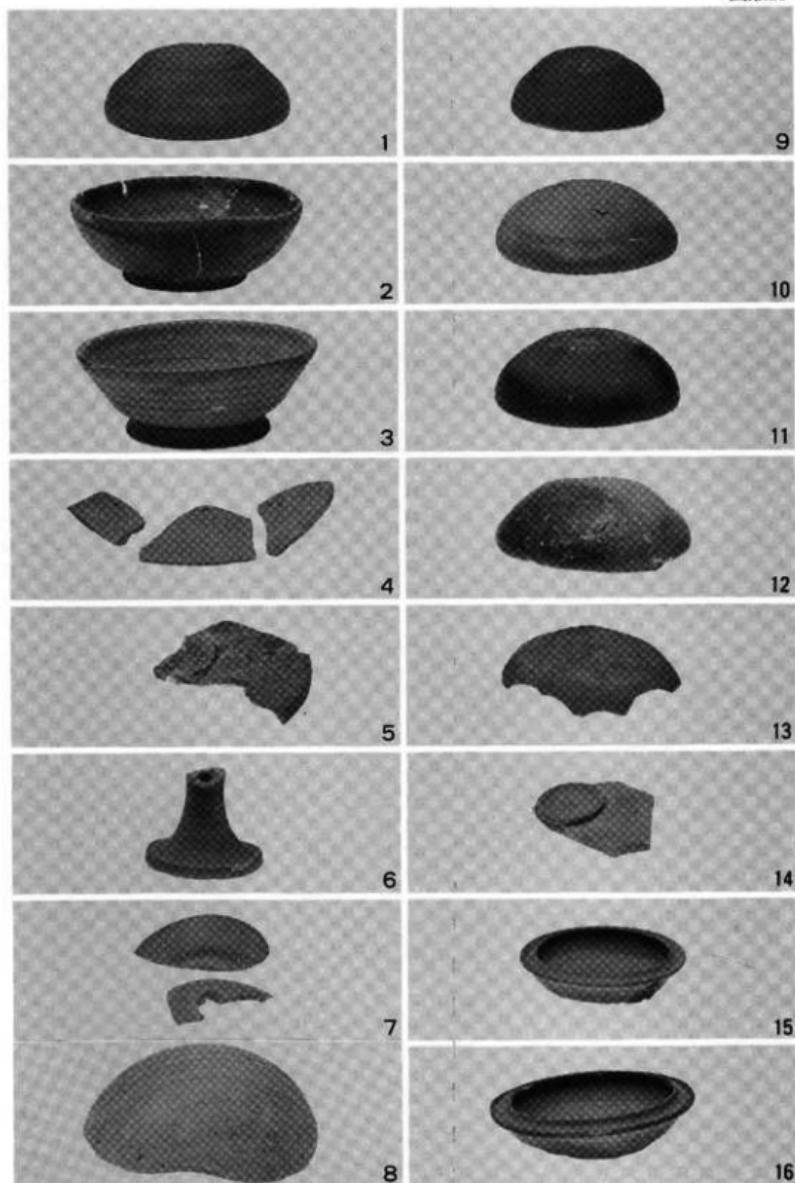
図版22



東支群12号横穴墓羨門閉塞状况

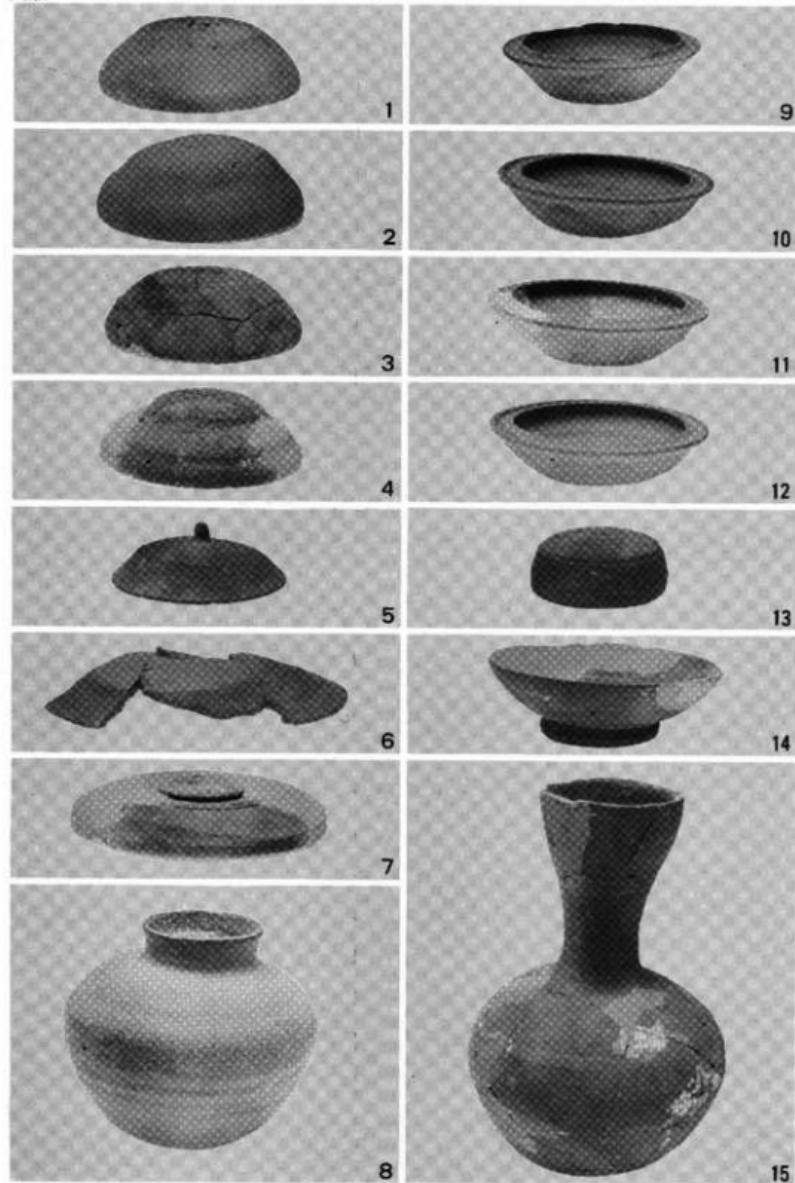


東支群12号横穴墓玄室内正面

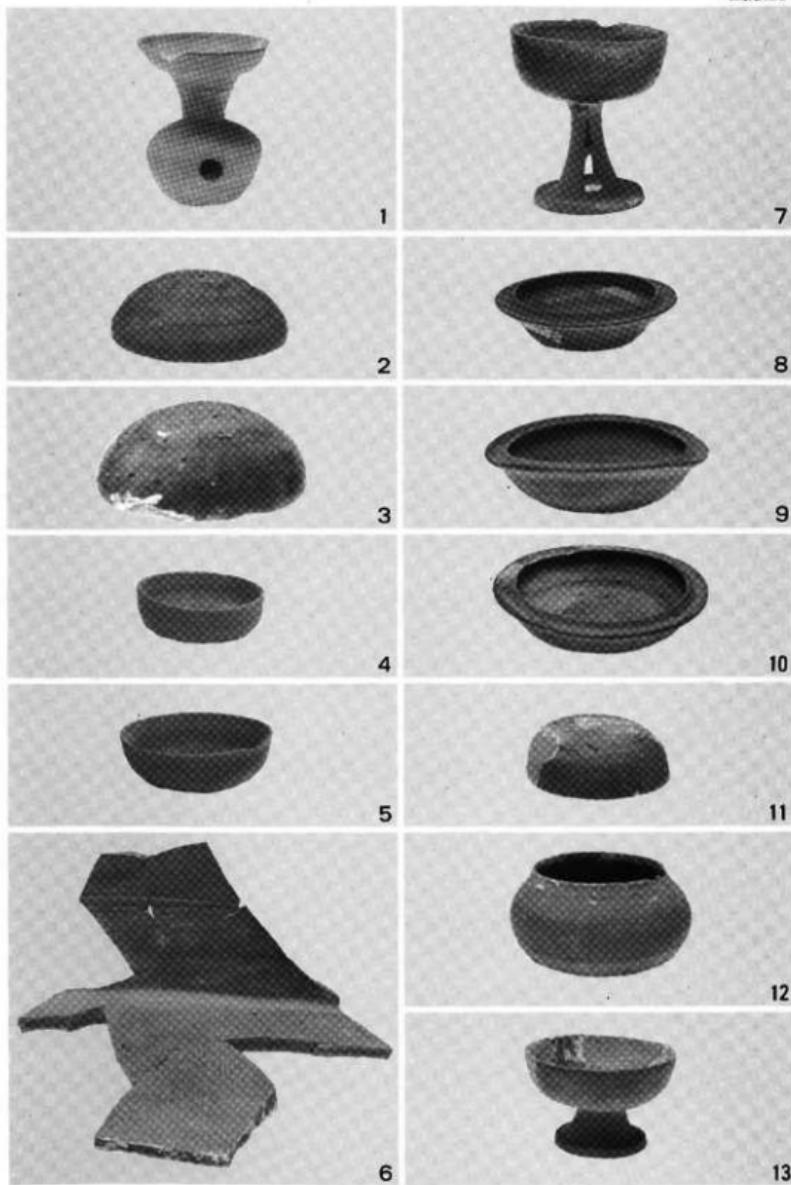


東支群1号(1~8)、2号(9~16)横穴墓出土遺物

図版24

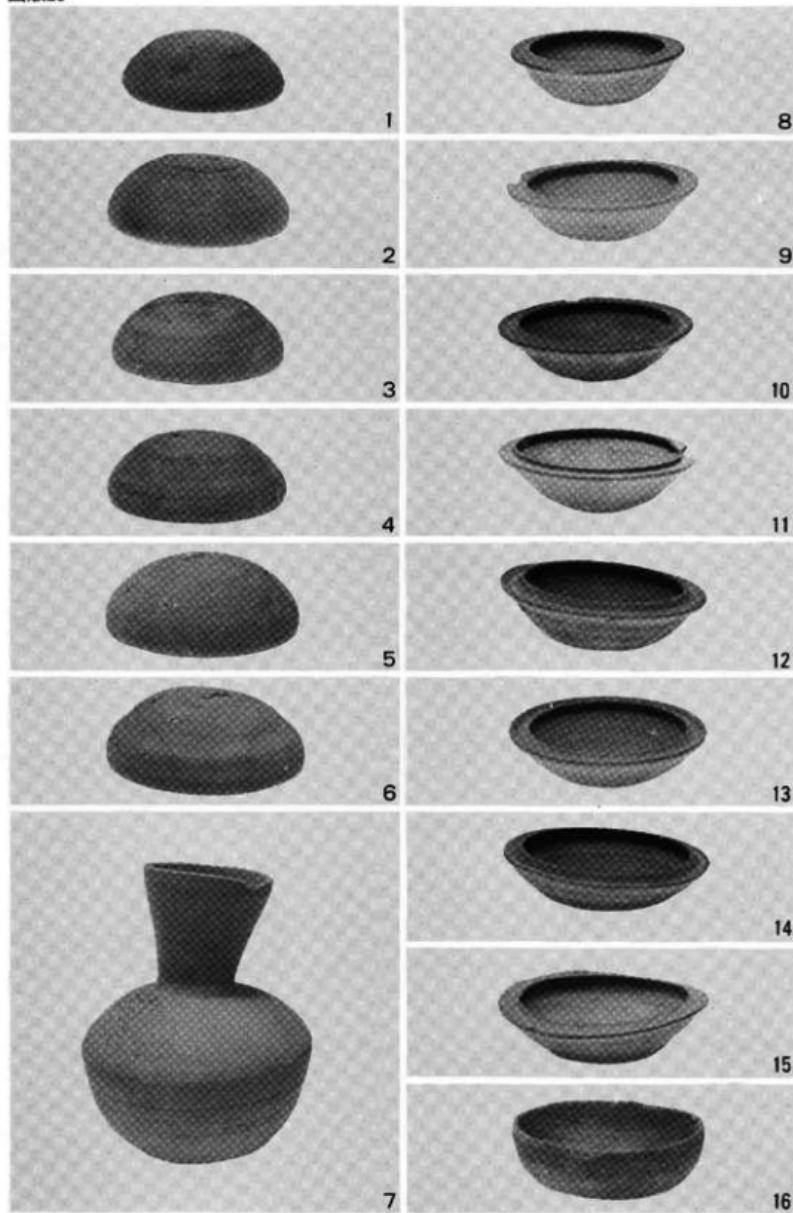


東支群3号横穴墓出土遺物

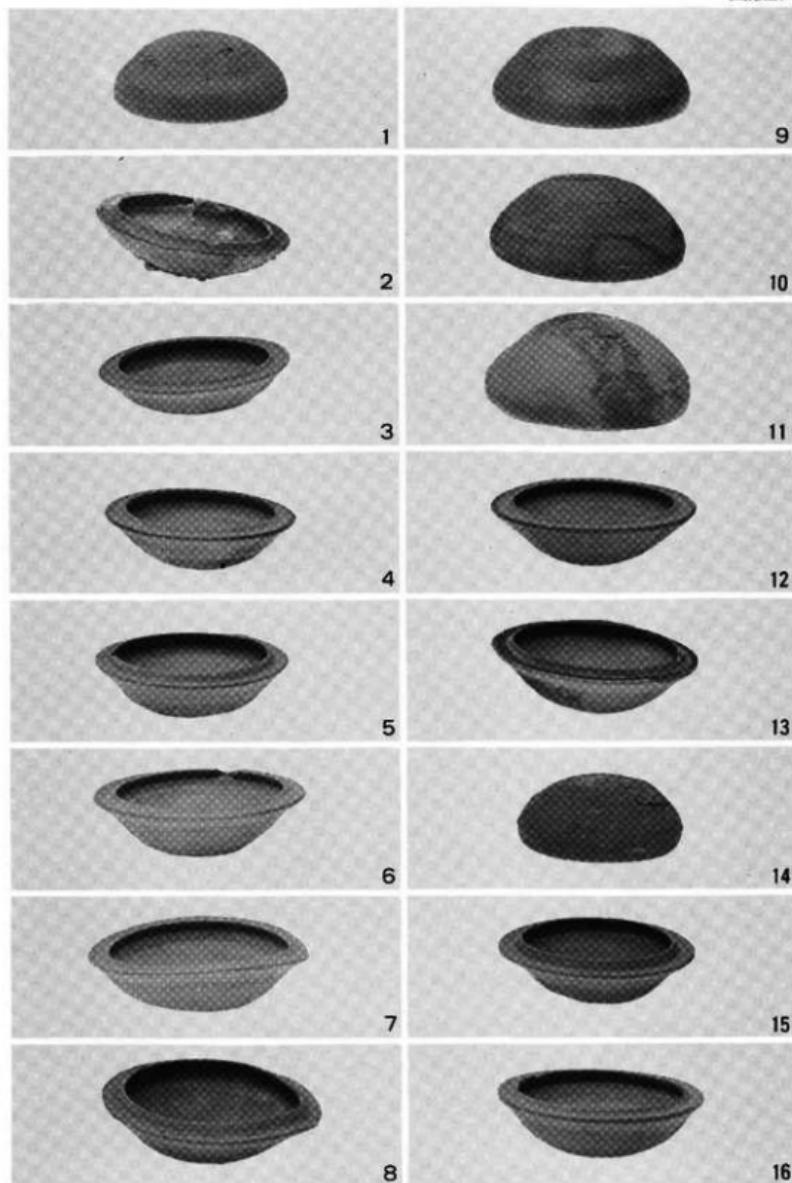


東支群3号(1・7)、4号(2~6・8~13)横穴墓出土遺物

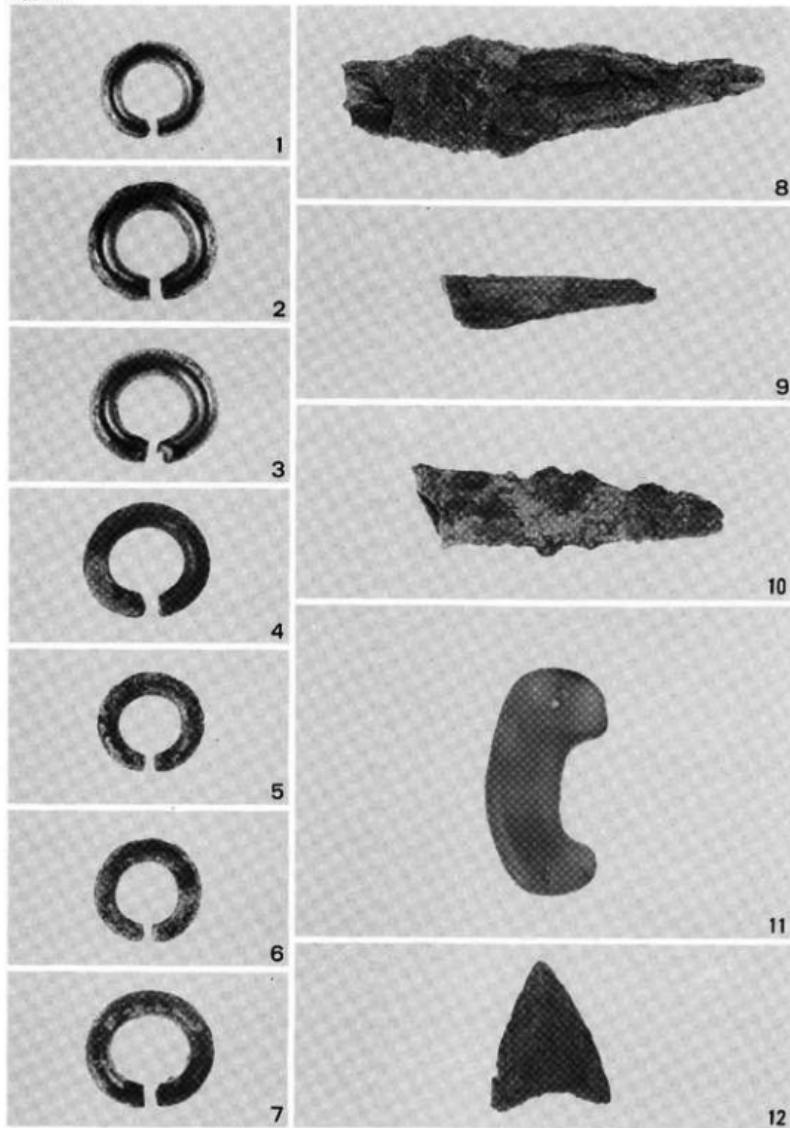
図版26



東支群5号横穴墓出土遺物



東支群8号(1~8)、9号(9~13)、10号(14~16) 横穴墓出土遺物



東支群3号(8・11)、4号(1～3・9)、9号(4～7・10)
横穴墓出土遺物(12は6号横穴墓前堆積土中出
土)

平野遺跡群発掘調査報告書 II

1984年3月

発行 島根県簸川郡斐川町

斐川町教育委員会

印刷 島根県簸川郡斐川町

島根印刷株式会社

TEL (08536)3-3500
